

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二五年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十四卷第十二号（通巻七六六号）

12月号・2025年

冬雷の表紙絵をたどる（二〇〇三年・平成15年）

白川道子氏歌集『小き日だまり』の中の題名となった作品、《柔らかき日ざし伸びきて米を研ぐわが足もとの小き日だまり》を描いたと加納久画伯は述べる。続けて、平成十一年五月三十一日の朝日新聞の「折々のうた」に《少子化に希望少なき小児科を子は選びたり迷いたるのち》が取り上げられたことを紹介している。この歌集は冬雷新時代歌集叢書第三巻であった。

〈編集室〉



12月号 目次

冬雷集	1
作品一	22
十二月集	38
残響集	42
作品二	48
作品三	56
十月号冬雷集評	桜井美保子 14
十月集 / 残響集評	鈴木やよい 15
大友柳太朗と美空ひばり⑦	大山敏夫 16
交流他誌に学ぶ	〈編集室〉 21
十月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 36
十月号作品二評	井上莒子・江波戸愛子 44
十月号作品三評	山本三男・橘 美千代 46
歌集 / 歌書御礼	編集室・佐藤靖子 55
十月号十首選（冬雷集・十月集 / 残響集）	57
十月号十首選（作品一・作品二・作品三）	59
勝川桂子歌集『老いを生きゐる』紹介	小林芳枝 63

冬雷集

大山 敏 夫 埼玉

デンマークは郵便配達廃止といふ日本はどうなるか、いつからならむ
先づ年賀状DM等が整理されその後のことか郵便配達の廃止

郵便配達が無くなつたらどうなる混迷を深めてゐる短歌雑誌の場合
短歌結社誌の役割の通信教育性その人の生き方にも影響及ぶ

添削指導は電子メールの遣り取りでも可なり使ひ方次第ながらも
通信制を卒業せしわれ日毎夜毎レポートを書き纏めたる記憶あり

郵便配達の料金の大幅値上げなどやむを得ぬと思へ廃止よりまし
郵便配達廃止を日本が選ぶより先に短歌結社誌など無いかもしれぬ

十年先などとは思はず一年一年が闘ひと取り組んでをり「冬雷」の組版

赤間 洋 子 東京

八十九歳ベンチプレス五〇キロを達成せる女性に拍手を送る

赤きTシャツ着てにこやかに微笑む彼女に老いの影なし

我は遂に九十歳になりたるが短歌も染めもまだまだ続けたし

四半世紀使ひ続けたオーブンレンジスイッチ押せど動かなくなる

勧められて買ひたるオーブンレンジまづは冷凍ご飯の解凍

焼豚を作らむとして説明書読めどなかなか理解ができず
 老いたる脳叩きつつ説明書読み返し遂に焼き上ぐ焼豚ひとつ
 温めと解凍だけではつまらない次の挑戦パウンドケーキ焼く
 四苦八苦して焼きたるケーキを食べてみて友に贈らむと再び挑戦

兼目 久 栃木

前の家の玄関先の割れ目から日々草の日ごと伸びをり
 しばらく振りあの法帖を取り出して風信雲書と取り上げ習ふ
 大谷が演ずる野球の真髓をテレビをかけて話を聞けり
 大谷のある試合をば見逃さじと気合ひを入れてTVを見る
 余つてゐる土地はないかと唐突に電話のありて尋ねられたり
 一本のキウリ十月に畑脇に一メートルも伸び花が咲きたり
 真夜中に眼を覚ましたり持ち来る懐中電灯を探しにあせる
 わが庭に並んで立てるムクゲの花一方は黄色一方は白色
 白い花と黄色の花の芯をのぞかせて風に揺られてひるがへるムクゲ

森 藤 ふ み 東京

学童の通学路なる歩道橋を渡り今日はスーパーに行く
 新築のビルの二階に内科歯科薬局に並ぶ郵便局の赤きマーク
 スーパーの敷地のビルに小規模の郵便局の開局したり
 使ふこと稀な切手ハガキだが郵便局の近くて安心す
 新しき郵便局のカウンター前に置かれる赤き椅子三脚

番号を呼ばれて赤き椅子に掛け僅かな預金の手続きをする
 スーパーの野菜売り場をひと巡り相も変はらずトマトの高値
 店前にバス停出来たる洋品店に閉店セールのチラシ張りあり
 持て余す馬鈴薯甘藷を娘に言へば何も言はずに料理してくれる

八十八

櫻 井 一 江 東京

早朝の「八十八歳おめでとう」孫のメールに初日始まる
 想ひ出す四国八十八の寺巡り八十八歳今日の己にうつし
 父ははも夫も成せざる齡にてしるべ無き道すすむが努め
 親しみしホテルは閉館仕方なく娘の選ぶ旅館に予約
 久々に鹿教湯温泉訪れて弟妹友らと来たりし面影
 行き交す温泉病院の患者さん若き職員と歩行の訓練
 信州の地産地消の宿の膳一途にもてなす心の料理
 柔らかき無色透明の湯につかり八十八歳の裸体を眺む

有 泉 泰 子 山梨

秋風の待たるる緑の葉の中に芙蓉の花の桃色のぞく
 墓前に菊の花あり生き生きと誰が飾るや思ひめぐらす
 吾が庭の柿の実一つだにならず緑の葉のみ虫がよろこぶ
 新婚時共に暮らしし先輩の子訪ねくる五十年ぶりなり
 父母に今日の一日の幸伝ふ優しく笑みて星かがやきぬ
 夫のゐて掃除買物生き生きと助けくるるは有難きかな

富田 眞紀恵 富山

私の生きざま見てきたるこの部屋にありがたうの言葉のこさん
明日も又げんきであることをただ願ひ「おやすみなさい」と天を見上げる
くれなゐにもみぢささやく昼さがり幼なの明るい声が聞ゆる

青木 初子 神奈川

土曜日の練習予定の通知来ず携帯電話を何度もいぢる
インターネットに接続されてゐませんと携帯電話に初めての画面
何時誰がインターネットの接続をオフにしたるか身に覚えなし
自転車に行かれる距離の店なれど七十五歳以上は付き添ひの要ると
独りでは相手にされぬ後期高齢子供の子定の連絡を待つ
充電し携帯画面のあちこちをタップすれども解決出来ず
内科医に薦められたる胃カメラに潰瘍見つかる要治療とぞ
胃潰瘍の治療始めて二三日薬の効きて食事作れる

山口 嵩 福島

草木も生気の萎ゆる猛暑日のつづきて今日の歩数は五百
真夏日も夜半となればやうやうに秋の足音白露を過ぎて
南西にぼつかり浮かぶ夏の雲彼岸過ぎての午後の真夏日
正義とは何かを神に訊ねたきガザの凄惨見つづける、何故
パン五つ五千人もの腹満たす、その奇蹟をばガザへと祈る
湿りたる煎餅食むと似た感じ総裁候補の討論ききて

本当に民を氣遣ふ心ありやそのときどきの己がファースト
これまでは取り組みもなき政策を「私はやる」と総裁選に

中村 晴美 茨城

農協の直売所にて新米買う地元産は慣れた味なり
新米は強気の高値売れるなら値下げをせぬは当たり前かな
水没は管理が悪か天災か結果知りたし三重の駐車場
晴れ渡る空に広がる鱗雲この暑き夏のやつと終はりか
青大将玄関タイルに横たはる秋の気配に遠出したるか
成長の鈍くなりたる畑の草道路際を電動バリカンに刈る
氷河期の五年後に来ると聞く夏が涼しいといふは歓迎なり
氷河期は雪も多きか耐雪の折板カーポート価格検索す

橋本文子 鳥取

待ちわびし退院カンファレンスかかりつけ医がオンライン参加
慣れぬ場に懐かしい顔嬉しくて画面の医師に思はず手を振る
我のため七名もの方集まりてこれからの事協議したまふ
通所する施設の小庭の草花楽し手入れのされぬ葡萄は悲し
退職後親戚農家の作業手伝ひ葡萄作りを今も忘れず
上ばかり見る作業に首疲れ地に寝転びてヨガをしたりき

吉田 綾子 ☆ 茨城

待ちいたる秋の気配に大樺はや反応し樹形の変り来

強風に煽られ飛びくる櫟の葉広き庭をば敷き詰め乱す
大櫟まわりの樹々に先駆けて落ち葉の山も大きくなりぬ
屋敷沿い巡りてみればか細くも風情ゆたかな尾花を立てり
採りきたる芒に刈萱、秋明菊を活けて捧げん月見の台に
この夏の暑さに耐えたるゼラニウム今朝の冷気に花弁の澄む
老いければ幼馴染も夫々に介護施設へ寂しきものよ
あと一首推敲中に猛烈な眠気襲い来昼餉ま近に

二〇二五年夏

高 松 美智子☆ 栃木

義姉選ぶ遺影の笑顔は初曾孫抱きて笑みたる集合写真

ふくよかなる面差しの笑顔は町内の誰もが知りたるヒサさんの顔
新しき戒名墓誌に刻まれて舅のとなり姑は眠る

自分のこと好きかと問いくる九歳は自己肯定感という言葉を口にす
むっとした顔してゐるだろう今われは私の中のわたしが呟く

安定を捨てて転職するという三十五歳十二年目の夏

二時間をかけて都内に通うという家のローンはあと三十二年

やらざりしことの後悔多き六十六歳汝の決断を後方支援す

田の畦の曼珠沙華の朱の鮮らけし父より届く新米一袋

初めての体験

高 橋 説 子 栃木

この年になりて初めての体験をしたり空き巣に入られたこと
通報も現場検証も初めての体験にしてただオロオロと

足跡を採らん廊下にうづくまる鑑識の人ドラマさながら
十本のわが指紋採る女性刑事の声はききと指やはらかし
三時間の検証のちに八人の警官去りて深夜にひとり
炙つてからサッシ割るプロの仕業なりとサッシ業者はメジャー操る
危機感の足りぬ吾への警告とひび割れサッシを目に焼き付ける
割られたるサッシそのままに出掛け来て名物「さんまのまんま」を食す

酒 向 陸 江☆東京

コロナ感染猛暑日避けて家内に籠れる生活ながく続きぬ

曼珠沙華の鉢植え二つ赤と白木陰に置きて秋を待ちおり

猛暑日の続きておれど曼珠沙華彼岸忘れず真つ赤に咲きぬ

曼珠沙華の白はとうとう花つけず諦めおれば葉のみ芽を出す

公園の端にあるいは大学の土手に咲きいる曼珠沙華群生

大会を終えたる後の昂りの冷めぬうちにとノートを開く

今日よりは一日一首詠わんか六十年の歌歴を聴きて

ノーベル賞受賞の坂口志文さん「一つ一つ」の言葉身に沁む

天 野 克 彦 大阪

十日まり山に隠れど暑かりし夏には勝てずこの身おとろふ

苛立ちを鎮めんとまなこ閉づるとき昼こほろぎの懐かしきこゑ

時の間の夕焼け空の美しさひかりをさしてからすとびゆく

肩にきてしばらくゐたる赤とんぼついと飛びたち空に紛れる

わが庭の木々のこずゑは色づきぬ秋の日ざしにひかりを反し
きはだちて黄のいろの濃き秋の蝶ひとり遊べりこの草花に
わが町のさくら通りの桜葉ははや紅葉して散り初めにけり
ファミレスとよびて親しむレストラン三日に一度はわが腹みたす
なれたゆゑ驚かないがロボットが料理もちくるしづしづしづと

大塚 亮 子 東京

鐘楼のみ残して広き寺庭に新しき墓並びて立ちぬ

墓石を洗ふに水汲みせし井戸は門前脇に今も残りぬ

盆近づけばバケツと束子持たされて姉と出かける墓の掃除に

墓掃除しをれば寺の大黒さん「ごほうびよ」と大き飴玉を呉る

墓掃除をへて帰れる道すがら大き飴玉舐めつつ帰る

夏くれば塩辛トンボ銀やんま東京の空にも数多飛びをり

秋近くなれば群れなす赤とんぼ都電の跡地の草むらに飛ぶ

エプロンつけてサンダル履きに乗り来たるをばさん大き買ひ物籠持ち

地下鉄の工事始まり大好きな都電にかはりバス走り出す

銀杏 嶋 田 正 之 埼玉

泣き交はし二羽のゴキサギ西へゆく餌探せたるけふ喜ぶや

甲州の季の恵みの詰りたる箱の届きて光る四房

描きたる水の深さを語る人その眼を見つめ頭をたるる

来年も百号描く算段を決めて公園の砂利を踏みしむ

先達の開始呉れたる展覧会来年遂に還暦となる

銀杏は黄葉になれずに散り初むる異常気温に抗議するがに

銀杏の実数多なり常よりも危機を感じてなせる業かも

名月を見むと思へど儘ならずテレビ画面に無念晴らさむ

たな曇る空に微かな光あり傘を持たずに昼飯とせむ

江波戸 愛 子☆ 埼玉

癌研の受診日娘の付き添うと言えばあなたはそうかとひと言

全身のCT撮りたるその結果メールに届く転移はないと

朝六時出でて帰りは十三時娘と夫を駅まで迎えに

駅前に待ちいる夫と娘のせ検査の結果を聴きつつ家へ

十年間通ったけれどまだ来るの看護師に問いいし高齢者おりき

点滴をしている夫を待ちながら居眠りしていることもありたり

肺転移ひとつのあれど年ごとに小さくなりてゆくありがたさ

最寄り駅降りて向かいの京樽に昼食もとめて家まで歩く

北海道あなたと一緒に行く夢の叶わぬままに歳重ねゆく

橘 美千代 新潟

血圧を上げて胎児に栄養と酸素を送る母体いためて

孕むことが母体蝕むといふか子は妊娠高血圧症候群に

血圧の上がりて母体危険なりと入院するや帝王切開

緊急の帝王切開に生まれきて自力にて息をし乳のみはじむ

二千七百グラムに満たぬみどり児の育たむとして乳求め泣く
七日目のみどり児の肌着洗ひをりうさぎの跳ねてさくらんぼ踊る
くらき部屋に眠らぬみどりご目を開けて十五夜の月輝く今夜
三週間まへは熱風入りし窓オリブの葉を抜ける風涼し
十月の半ばも木槿咲き満ちて白き花ごし鈴なりの柿

ブレイクあずさ☆ カナダ

平飼いの鶏の脚にパワーあり大地を蹴りてびゅんびゅん走る
鶏ら好みの場所にて眠りおり羽毛を揺らす秋風の中

二十日ほど二匹の猫の世話にゆく猫じゃらし持ちイヌハツカ持ち
飼い主の帰還と思うや玄関に小走りに来る二匹の猫は
のんびりと猫のころがるアトリエに家主の画家の手になる花花
難しき病に侵されなお画家は絵を描く自宅に猫と暮らして
ユニークな線生まれると画家は笑む筆持つ利き手の震える日々も
車いすに画家は旅する八キロ生まれ故郷のミュンヘン目指し
すらり立つブロード美人の写真あり病に倒れる以前の画家の

稲田 正康 東京

工事音いまだ立たざる朝まだき鳥一羽がしきりにも鳴く
やうやくに涼しきあした静もりて土鳩ひとつが遠くに鳴けり
レンタルのベッド横浜まで見に行つてくれたといふぞ子よ有難う
歩き方これで行けるか参集の東陽町は電車ひと筋

無駄のやうに云はれし木造大リング大阪万博の象徴となる
核兵器おのれら持ち他に持たせぬを核拡散の防止とぞいふ

田端 五百子 岩手

すだれはね覗けば現世たぢろげる残暑の雲の流れゆくみゆ
エレベーターに潜みたる蚊は紳士の背張り付き九階降りて行きたり
晴天に輝ひゐたる一片の雲消しかねて夏の入り日は
をとこ日傘ダンディー気取るか闊歩する目抜き通りの残暑は厳し
皮のまま桃丸かじり溢れ出る蜜が双手の間隙間滴る
捕虫網すいつとくぐりて赤とんぼ早の空へ消えてゆきたり
海風の風鈴鳴らす駅ホーム軋む列車が旅行生吐く
結界を繋ぐと伝へて彼岸花田んぼの畦に赤々と咲く

山本 三男☆ 群馬

空中に目に見えぬ虫いるらしくトンボは宙に高く群れ飛ぶ
この川に鴨の戻るはいつの日か涼しき風の散歩路に吹く
わが庭にモグラ居るらし盛り上がる土踏みつけてもまた盛り上がる
どのような経路をたどりわが庭にモグラ来たるか舗装路を越え
ゴキブリの姿を見れば駆除剤の期限過ぎいてまた買いに行く
毒入りの餌は容器に減りていてネズミの騒ぐ音しばしせず
わが庭の柿の名前は禅寺丸甘さ劣れど充分食える
毎日の散歩なれどもこの朝は赤城の山を見る余裕あり

年金の振り込み通知のはがき来て散らかる部屋に放りおきたり

中村哲也 宮城

今日ひと日ダイヤ乱れる新幹線我乗るはやぶさ定刻に発つ（十月十日）
最近はやの乱れ度々に遠出は余裕を持ちて行かなむ
静かなる車内に自づと瞼閉ぢ開けばもはや宇都宮を過ぐ
午後九時の東京駅の喧噪にいつもながらに感心したり
初に見るインド更紗のアンティーク布地に真紅の染の鮮やぐ
美術館六カ所巡る我が予定三カ所巡り疲れて止める
日曜の夜の東京駅なかに祭りの出店の賑はひ思ふ

「しごはや」と言はれその意を聞き返し「仕事早い」の略と知りたり

姉川 素枝子 福岡

あぢさゐの八重さきてをりあぢさゐの模様の上着に部屋隠りをり
九州の北にとどまる不連続線あめを落とさず湿り気多し
年越えて地下に作りし貯水池にたまる水なく梅雨あくといふ
小笠原の海に産まるる台風は東日本の雨になるらし
茨城に孫すみをれば雨に日に耳かたむくる気象の知らせ
停まりて思ひだしては落ちてゆく硝子の面の雨の滴は
朝の飯まだこぬやうな心地して時よみてをり惚といはむ
惚とはかかることかと自らを笑ひごとではないと叱りぬ
一人生まれひとり去りゆく現世に歌つくりの歴史的仮名遣ひ貴し

井上 菅子 山形

水槽に金魚が元氣よく跳ねて家族が揃ひをりしかの日々
雨が降らずに枯れたる草と除草剤撒かれし草と地続きにある
無相無念に草取るわれに囁きて藪蚊寄りくる君も瞑想せよ
鶏頭は今年も咲きぬ出荷者は秋の華やぎ好む人らし
風船蔓壁に這はせてのどかなる鄙のそば屋に客絶ゆるなし
いつ見ても殻に籠もれるかたつむり心開かぬ類ひか君も
どこにも当たらぬ石蹴りてゐる二度三度荒草はただふと笑ひて
有効に使はねばならぬ残り時間着物の皺は伸ばさずにおく
遙かなる港の秋を見てきたか雲はむくむく白く膨らむ

井上 楨子 新潟

日の暮れに静かに落ちゆく太陽に丘陵の木々の輝き白し
連日の猛暑に夫の透析を送迎する友は愚痴をこぼさず
クリムトの絵の金色を浴ぶる気分銀杏並木の下を歩みぬ
小鳥らの雛を啄む様見れば育つ鴉の子を奪ひたき
秋彼岸近き昼過ぎ日の照りは余剰にまさる真夏日となる
御時世に店を畳むと鮮魚店鰯の煮付を近隣に配る
ブレーキを踏む場所わきまへ仏像に一礼しつつ参道を下る
楽鳴らす柱時計の柔らかし客おし並べて笑顔を向ける
人生の行き着く先の憂ひごと想ひて短き秋の日を浴ぶ

十月号冬雷集評

桜井美保子

大玉をいくつに切られし西瓜かなその一切れを子と分け食べる 森藤ふみ
西瓜の大玉に思いを馳せているところがいい。昔は丸ごと並べて売っていたが今ではカットされたものが売場に置かれている。その一切れを子と食べるというほのぼのとした情景が目には浮かぶ。

園児らの午睡の時間静まりて猛暑の道にも人影少なし 櫻井一江

一連の作品を読むと保育園が住まいの真向かいにあるとのこと。暑さが一番厳しくなる午後は午睡の時間がある。賑やかな声が止み静かになる。猛暑の道に出歩く人も少ない。夏の午後を聴覚と視覚で捉えている。

二晩ほど扇風機の風に過ぎしみて気力の失せる怖さを知りぬ 青木初子
エアコンを使わず扇風機だけで酷暑の夜を過ごすとなると、その風は温風となり熱中症になる危険がある。「気力が失

せる怖さ」はその体験から滲み出た言葉だ。命の危機は日常の中にもある。

異常なる暑さをよそに手際よく嫁御と孫とで盆棚を組む 吉田綾子☆
耐え難い暑さの中をお嫁さんとお孫さんが手際よく盆棚を組んでくれる。そのことへの感謝の心。「嫁御」という言葉にあたたかい繋がりが感じられる。

人と人、友と友との諍いもささいなことから大きく膨らむ 酒向陸江☆
戦後八十年の回顧と現在世界で起きている戦争への思いを詠んだ一連の最後の歌。諍いというものは考えてみれば元は小さなことから起きている。その段階での解決は難しいようだ。

干し柿にせむと柿の皮をむく母の手つきは機械さながら 大塚亮子
まるで機械のように休みなく確実な動きで柿をむく母の手。それは作者の子供の頃の驚きだったろう。懐かしい母の手の動きを鮮やかに表現している。
キャベツの葉二枚はがして鍋に入れ作るスープが体ぬくめる 野村灑子

自らのために作るキャベツのスープ。それは体も心も温めてくれる。明日への活力にもなるのだろうか。「二枚」という具体的表現がいい。

空色のズツクの少女軽やかに溜まり水に映る雲を超えたり 田端五百子
絵本の一場面のような歌。少女のズツクは空色、雲の色は白だろうか。水に映る雲を飛び超えた少女の体の軽やかさ。詩情ある表現に注目したい。

コメントに応えんとして暑き中汗を流して動画を作る 山本三男☆
作者の作った動画に温かいコメントを寄せてくれる人がいる。嬉しい反響だ。その声に応えて暑さにもめげず、一心に制作に励む様子が感じられる。

ザリガニの大量死などの報道にわが池の水温手許に確かむ 井上楨子
猛暑でザリガニが息絶する田んぼなどは水温が高湿となり酸素不足となる。ザリガニの大量死を知って、作者は庭の池の水の温度をすぐに確かめる。池の鯉をなんとか守りたいという思いなのだ。

十月集／残響集評

鈴木やよい

幹枯れて小さきままの西瓜採り仏壇に置く夏のしるしに 川俣美治子☆

この夏の暑さに弱ってしまったのだろう。西瓜は大きくなれなかった。それでも収穫した西瓜を初物として仏壇に供えている。確かに過酷な夏を示す印といえよう。

わが身体ほぐされゆかむ珈琲のガラスの水触れ合ふ音に 松居光子

炎暑の外から喫茶店に入ったのかもしれない。アイス珈琲のグラスの中で氷の触れ合う音がする。その音に「フー」と気持ちちがゆるんでいく。厳しい夏の一コマだ。

脳トレの問題集に嵌まりあて夜の更くるまで解き進めをり 山本述子

脳トレの問題集に嵌まっているという。最近脳トレ本、パズル、アプリなど様々なものが出回っている。作者も夜が更けるまで夢中で問題集を解いている。これだけの集中力で取り組みば、効

果は大きいと思う。

スーパード「やばい」を使う老婆いてうまく使えぬ我は驚く 植松千恵子☆
若者の間では新しい言葉や使い方が次々に生まれている。一部は定着するかもしれないが、大抵はすぐ古くなって廃れてしまうように思う。

病棟に始発電車の走る音今日の手術に眠られぬ夜 大野 茜

しんと静まりかえった病室に始発電車の音が聞こえてくる。眠れぬままもうこんな時間になってしまった。手術の不安がひしひしと伝わってくる。手術がうまくいきますように。

南方の戦地も広し義父の居たジャングル何処か地図に探しぬ 松崎みき子
お義父様は南方のジャングルで戦ったとか。飢餓やマラリアなど悲惨な状況であつたと思う。終戦から八十年、改めてその地を地図で確かめている。

五十年余吾の独り言聞きくれし博多人形たをやかにして 津田美知子
五十年以上も身近に寄り添ってくれた

博多人形。何かあれば、この人形に話しかけてきた作者。聞いてくれるだけで心が楽になったことだろう。

消去法で事を決めたる日キッチンで答はひとつの数独を愉しむ 井出裕子
なかなか決められない事柄と、きっちり答の出る数独の対比がおもしろい。消去法に頼った作者のもやもやは、数独で解消されたかもしれない。

血糖値の上昇抑える朝納豆葉のような食事味良し 高藤朱美☆

納豆には食後血糖値の上昇を抑える効果があるという。作者も毎朝食べているようだ。おいしいと言って楽しみながら食べることで、さらなる健康効果が期待できそうだ。

いわし雲大群となり泳ぎ出す行方満月のぼりはじめて 手賀裕子☆

空に浮かぶいわし雲が風に流される。「大群となり泳ぎ出す」の表現にスケールの大きな動きがみえる。そして雲の行く先には満月がのぼる。広大な自然のなかにいるような気がする。

大友柳太朗と美空ひばり⑦

—その短歌と情—

大山敏夫

時代劇のラブシーンなのでソフトなものが、美空ひばりもまた、そういう演技が苦手だった。映画初出演という市川雷蔵と共演の「お夏清十郎」（一九五四年）では冬島泰三監督から「ひばりちゃん、もうちょっと甘えるようなシナをつくって…」と幾度も求められる。ひばりは「だって…」と照れまくり「私、恋愛したことなんか無いの…」と漏らす。冬島監督に「アプレ嬢さんかと想像していたら、とんでもなかった。実際はその反対に大変な純情娘さんだね」って語らせた。同じ年に「伊豆の踊子」（野村芳太郎監督）で共演した石濱朗も、「噂で聞くようなこましゃくれた少女ではなく、礼儀正しい明るい少女だった（『終演のとき』一九九八年 人間と歴史社刊）」と回想している。ひばり自身ではなく、保護者の喜美枝母親ら周囲の言動がそういう「アプレでこましゃくれた」娘の噂（イメージ）を生んでいたのかもしれない。

幾度か共演した岸恵子は、十四、五歳頃の映画の楽屋での思い出を語る。撮影スタッフの一人の不手際を荒々しく喜美枝母が叱責するのを鏡に向かいながら黙って聞いていた美空ひばりが、そのスタッフの去ったのちに「ああいうのって、

腹で思っても口に出して言うものじゃないのよ。」とたしなめたという。

ひばりの直筆自伝には次のような記述があった。「私はしゃべることが好きでなかった」と言い、続ける。

何もわからぬ私が記者の質問を受け、それに答えない時には「威張っている!」「女王様みたいだ!」と書きました。

なぜ私はペラペラ喋らなかったか……。私はお喋りな子供が今でも嫌いです。親の陰に隠れて恥ずかしがっている子を見ると、つい抱いてみたくなってしまふ。

写真家の大竹省二の回想。雑誌の依頼の写真撮影があり、「フラインダーを覗くと表情が固く、どこか寂しげな愁いがあった」。うまく撮影できず気にしていたら、ひばりが「先生、ごめんなさい。私、人見知りするので…」と謝ってきたという。喋ることが好きでない…。さらに（十分に大人ながらも）ついつい人見知りする……。本人がそう言っているのだ。

福島泰樹氏歌集『蒼天 美空ひばり』の中には、

憤懣はやるかたなくも笑ってやるこまっちゃくててなにわるい
（昭和二十一年）

こまっちゃくて唄う大人の悲しみを歌っていれば涙溢れ来
（昭和二十七年）

の歌がある。昭和二十一年時代での美空和枝には、こんな強

い開き直りはなかったろうが、二十七年時代の美空ひばりに、この歌の気分、自負めいたものはあったかと思う。

冬島監督ではないが、美空ひばりという人は、世間の評判や印象とは違う、特に色ごとにはとても臆病で不器用、生真面目な完璧主義者、控えめで気配りの女性だったのだろう

映画でのラブシーンカット事件から三年ほど後のこと。昭和三十七年（一九六二年）十一月に行われた東京のホテルでの美空ひばりと小林旭との結婚披露宴の場で、二人の交わし合ったとする短歌も披露された。それは二人の激愛の演出効果にもなったろう。短歌は次の通りである。

我が胸に人の知らざる泉あり つぶてを投げて乱したる君
美空ひばり

石を持ち投げてみつめん水の面 音高き波立つやたらずや
小林 旭

この二人の結婚式には大変な数の人が招かれた。映画関係者も多かったとあるが、ひばり側の中に大友柳太朗が居たかどうかは誰も何も書いていない。仮におめでたい式に居たとして、二人の短歌を知ったとなったらどのような感想を抱いたことだろう。そこが大いに気になっている。なにしろ大友柳太朗は、あの石田波郷を生み出した大の功労者だし、本人も自身の歌集まで出した歌人なのだ。わたしの妄想だが、こ

の美空ひばりの、あつと驚く短歌発表の裏側にも、柳太朗のかげがあったのだとしたら愉快である。

「何しろあの騒がれ方は尋常じゃなかった。芸能界の結婚で新聞の号外が出たのは初めてのことらしいけど、いまだきのカップルと比べる方が野暮というものだろうね。」（『小林旭回顧録 マイトガイは死なず』と小林旭は回顧している。

二人の短歌をよく読んでみると、ひばりは、「私の胸に秘めた泉が、つぶてを投げこんだ君によって乱された。どうしてくれるの。」と歌っている。一方旭は、「石を泉に投げ込んで見つめてみよう。どんな反応があるのか。音高く波が立つだろうか否か」というのだ。作品に込められた意味を考えれば、旭の歌が先に作られ、ひばりが反応した順となる。

前述の小林旭回顧によると、二人の関係を生み出すにあたり、先にアプローチしたのはひばりの方だとある。

月刊「明星」の企画で二人が「互いに人気投票のナンバーワンになったという事で対談することになり、何だかよく分からないけど、最後の方でひばりに『ところであなた、恋人いるの?』と聞かれたんだ。あの時『いないよ』と答えたのが身の因果。当時の俺は浅丘ルリ子とどうのこうのと言われていたから、適当に『います』とでも言っておけば、その後の展開は変わっていたかもしれないね」

何かわからないが、とか、身の因果や、適当に答えておけばこの結婚はなかったというニュアンスで、言葉の選び方が変である。何故なのか。何より、これではひばりの短歌に歌われている「つぶてを投げて乱したる君」が何によるのかという話になろう。

齋藤慎爾著『ひばり伝 蒼穹流謫』（二〇〇九年講談社刊）ではひばり自身の言葉も引用しながら、次のように纏める。

対談することは引き受けたが、日取りや場所の設定で一波乱があった。両者とも誇りが高く、どちらも

「こちらの指定する場所に向いてきて」

と突っ張り合い、まとまるのに一悶着があった。しかしともかく対談は和氣藹々裡に終わった。対談後、ビールのグラスを傾けながら、お嬢、アキラと呼び合い、二人はその部屋でチークダンスまで始める始末。

年明けて、ひばりに旭から電話が入る。「あれこれ考えた。おれは、どうしても、お嬢と結婚したい。大切に。承知して欲しい」と思いつめた声であった。ひばりの気持ちも一気に傾いていく。

真実がどうなのかはともかく、これなら美空ひばりの作った短歌の意味がよく分かる。特に「大切にする」という電話の言葉は、ひばりの心の中の泉を引っ掻きまわした。「さもあらん」となるだろう。

人の巡り合いから結婚に至るまでの束の間の婚約時期に作られた幸福感たっぷりの中で、すっかり舞いあがった美空ひばりの姿を物語っているではないか。

「二人でいればどこでも幸せ」と言っていたのに、その幸福は結婚式のその日にすでに破綻の様相を表してくる。それは齋藤慎爾著『ひばり伝 蒼穹流謫』によると、

結婚式当日、会場に自動車会社のセールスマンが、ジャガーの代金の支払いを請求に来る。新婚旅行用の真っ赤なジャガーを旭は買い、代金はひばりのマネージャーから貰ってくれて言ったという。「今日のような日に、どうなっているんだ」とマネージャーの嘉山登一郎が、旭に問い質すと、「お祝いの金があるんだろ」と、旭がけろりとして答えたこと。百七十六坪もの新居の三千万円の土地代は、すべてひばりが出していたこと。新婚旅行先の熱海の旅館で、テレビで流れていたひばりの歌に、「音程がはずれている」と旭が言い、「歌については私の方が先輩よ、いい加減なこと言わないでよ」と口論になったこと。激昂した旭が飛ぶ鳥を落とす勢いで投げつけたグラスが、顔をかばったひばりの右手に深い傷を負わせたこと（翌日、ひばりは隙をみて、旅館を逃げ出している）。という事件が起きた。結婚直後からの破綻は尋常ではない気がする。

竹中労著『完本 美空ひばり』（筑摩書房刊二〇〇五年）の

それにしても、ひばりの短歌は初めて作ったとは思えないものである。幼い頃に百人一首に馴染み、誦んじていたそのなのでその記憶を生かしたのだろう。無駄な言葉がほばない。上の句の観念的な内容の表現も甘さを抑え解りやすく単純化が効いている。そして下の句も端的だ。素晴らしいのは、作者の心情が、心の動揺が、熱が飾らず溢れ出ているところか。この短歌作りの呼吸は、いったいどういうふうな身につけたのであろうか。

美空ひばりと小林旭の、婚約時期に録音されたというソノシートが雑誌「平凡」の別冊付録となった。その中には、二人の幸福感いっぱいでの対話と、互いに作詞作曲したという二人の歌が紹介されている。和枝、ダーリンと呼び合う睦まじい二人で、忙しくてなかなか会えないけど「電話って楽しいがある」って話している。そこで、ひばりが「これって私の今の心境よ」って作詞作曲した歌を披露する。それが「ロマンチックなキューピット」であった。

♪青いお空にぼつかりと 白く浮かんだ綿の雲 私に羽根があったなら あそこに飛んで行きたいな キューピットではないけれど みんなに幸せ あげたいな ロマンチックな昼さがり

この可愛らしい曲をわたしはうろ覚えながら知っていた。これがひばりの歌で、しかも作詞作曲だと本当に驚く。二

方が詳細なので参考にする。小林旭はナルシストに加えて亭主関白で時には腕力にもものをいわせた。そういう男の美学によって美空ひばりを支配しようとしたようである。人前でわざと抱きしめたりキッスしたりする。一方では「和枝（ひばりの本名）水を持って来い」やら「靴を揃えろ」とか指示する。これはひばりが一番拒んだようなのだが、二人の寝室さえ報道陣に披露する始末。何より決定的になったのは、ひばりのうたった歌の音程が違っていた云々の一件だった。実際には、大晦日の「紅白歌合戦」で歌い終えて帰宅した深夜の話だと云われている。美空ひばりは自分の最も大事とする芸がまったく理解されていないことをさとした。

美空ひばりの映画をたくさん作ってきた沢島忠監督と、作家井上ひさしの対談が『美空ひばり「歌う女王」のすべて』（文藝春秋一九九〇年刊）の中で企画され、井上ひさしが貴重な思い出を語っている。

井上 あれは有楽座でした。『おかしなおかしな世界』というギャグばかり集めたような映画があつて、たまにたま疲れていたもので、二階の指定席を買って、それを観た。映画が終わったら、一番後ろの席に小林旭さんとひばりさんがいたんですよ。小林旭さんがちょっと横柄な態度をとってしましてね。けしからん、われらのひばりにその態度は何だ、と腹を立てたことがあります。ただ、

小林さんと婚約したとき、ひばりさんが心境和歌を發表した。その中に「しのびつつ人目をさけて映画見し つかは晴れて来んとぞ思う」というのがあった(笑)。そこでぼくは、ああ、あのときのことを詠んだのかもしれないと思った。光栄に思いました。もともと、『ウエスト・サイド物語』を男装して観に行つたという話もあります。ですからそのときの歌かもしれません。とにかくその一回だけですね、ひばりさんの地の姿を見たのは。井上ひさしの思い違いもあった。この映画の『おかしなおかしな世界』というのは一九六三年十二月公開だから、すでに二人は結婚していた時期となるので、思い出している短歌を詠んだのは、『ウエスト・サイド物語』(一九六一年十二月公開)の方だとなる。この時点だと結婚以前の話となるはずだ。大切なのは美空ひばりの短歌作品が、結婚式の日に披露された一首の他にもあったこと。もしかしたら、まだ他にもあるのかもしれないが、とにかくここではつきりしたのは、

しのびつつ人目をさけて映画見し つかは晴れて来んとぞ思う
美空ひばり

なる一首の存在であろう。男に変装して小林旭と二人で密かに観た映画。その特別感、ドキドキ感もあって、歌の中に情の躍動が感じられる。面白いのは、ひばりの選んで観る映画がギャグ満載もの、そして本場のミュージカルということだ。

交流他誌に学ぶ……(編集室)

◆朔日 2025年10月 第382号

外塚喬氏編集発行人の埼玉県所沢市の結社誌。一九九四年一月刊という。本文56ページ、作品欄ページ数が約37ページある。これら作品欄は基本的に大型フォントによる1ページ22行組みでゆつたりしている。巻頭にお二人の特別作品があり、1ページ11行組みの見開き二十首詠となっている。とても読みやすく、作品欄に重きをおく、編集と感ずる。残すページには内部作品批評、エッセイ、歌壇時評ありで変化に富む。通常の作品欄は五つに分かれ、桐花集(39名)、花辛夷集(4名)、辛夷集(15名)、つきの木集(9名)、けやき集(19名)という内訳となる。規約には毎月十首投稿できるとある。更に「作品は歴史的仮名遣いを使用」と規約にうたう。

じゅうじゅうと肉を焼きつつ聞いてをりわたりが辞めたあとの様子
岸野亜紗子

手順通り授業終へればチャイム鳴る嫌ひになれぬ教師の仕事
安齋 博子

巻頭二十首の二氏は働く世代の方らしく、生真面目に対象と向き合う姿に張りがある。若さというものか。「桐花集」トップは、しばらくを流れに沿へばわがうちに積み重なりてくる水の音さけやうのなき体力のおとろへは善悪正邪の判をにぶらす等の外塚喬代表の作品。とても自然に自身の内面との闘ぎ合いを歌っている。外塚氏は巻頭言、作品評また、「多磨を読む」(71回目)と様々担当して精力的である。巻頭言の「ポストが無くなる」には共感した。これはそのまま「我が事」であり、たまたまこの問題を詠んだ一連を筆者も最近作っている。

〈0〉

この時期には、沢島忠監督と時代劇ミュージカル映画を志していた背景を想起させる。ついでに言えば、歌の中のへいつかは晴れて来んとぞ思うのその日が、井上ひさしに目撃された日ということになる。変装しなければバレルのだ。八小林旭さんがちよつと横柄な態度をとってしまてね。けしからん、われらのひばりにその態度は何だ、と腹を立てたことがあります。Vという目撃証言にもなっている。変装せず堂々と二人で観た映画なのは良いが、そのちよつとした立居振舞いからも、その日常の状態まで看破されてしまう皮肉さだった。福島泰樹氏歌集『蒼天 美空ひばり』には、

小林旭「惜別の歌」うたうなかれ滔々として流れゆく河
という歌がある。二人の結婚生活は二年もたなかった。

あるテレビ番組で「この歳で言うのも変だけれど、わたし今ね恋がしたいのよ」と言う四十代の美空ひばりを観た。一度は失敗した結婚。しかし懲りた訳ではない。この齢なら、たぶん本音だろう。直筆自伝にも、△男の人がハッキリしてくれないとイライラしてくる。もつと男性も積極的になってほしい。…結婚に破れた私を、女らしい気持ちに蘇らせてくれる男性は、あらわれてくれるのかしら…と綴っている。ここでも臆病で不器用な自分を晒しながら。

〈続〉

今回は高橋輝次著『古書往来』(二〇〇九年「みずのわ出版刊」を紹介し、出版界が元氣だった頃の意欲的な一巻です。

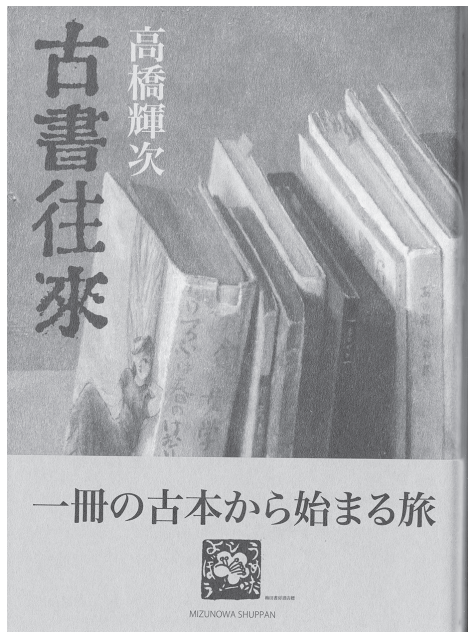
犀野良人氏の帯分は次の通り。

この本を通読した人は、おそらく今すぐにでも古本屋に駆け出したくなる。かならず一冊や二冊の未知の本が見つかるはずだ。高橋さんにしてみれば、

「発見のない古本はない」と言わんばかりであろう。

高見順に「描写のうしろに寝てゐられない」という名高い一節があるけれど、高橋輝次さんは古書の後ろに寝てゐられない人なのだ。(犀野良人)

A5判本文350ページ 定価本体二八〇〇円
*購読希望者のあれば、小誌編集室で取り次ぎます。



高橋輝次著『古書往来』表紙

作品一

桜井 美保子 神奈川

新山下運河のそばの病院に通ふも不思議な縁といふべし
エアコンの室外機の点検する二人ときどき言葉交はして作業す
病院の花壇の前に擦れちがふ両腕の松葉杖軋ませる人と
脳内にプラークといふ要らぬもの溜まるらし夫その検査受く
イトインスペースに遅き昼飯を食べればふたりほつと落ち着く
横浜港に近き運河のほとり行く潮の香りに包まれながら
夏すぎてなほ盛んなる露草の青すがすがし護岸の柵に
繁栄の歴史刻みてゆつたりと流るる運河に細波の立つ
通院の帰りに寄りて心ほぐす園芸コーナーの秋の草花

正田 フミエ☆ 栃木

あね逝きぬ施設の面会叶わずに別れとなりて胸のふさがる
母親の死をたんたと甥は告げ延命治療を辞退したると
仕事中に救急車から母親の延命治療を問われたる甥
施設にて療養のあねは食後直ぐ倒れ救急車に搬送されたり
施設に行き甥はひ孫の写真見せ喜ぶ母が七日後に逝く

病消え柩のあねは安らかに眠っておりぬ七十九歳

白菜を定植為すに高温を下げる白黒マルチ買いたり

白菜を白黒マルチに定植し直ぐに防虫ネット掛けやる

飯塚 澄子 東京

五、六十センチの茎に赤き花見事な姿蔓珠沙華とて

九月下旬日毎に赤き花咲きて庭中の蔓珠沙華女王のごとし

朝まだき大きめの秋の蝶の来て赤き花やら草木に移ろふ

秋の蝶庭中に遊ぶ姿見てひととき楽し蝶と過ごしぬ

不忍の池畔の柳散る気配早めに迎へる季節の移り

「八月号作品一評」に二方の批評嬉しく会に披露す

入浴のサービスの日に係の人「冬雷」を見てコピーなしたり

入浴の洗ひ手の動き心ゆかしと批評受けたりありがたき「冬雷」

斉藤 トミ子☆ 栃木

佐野支部の先輩なりしヒサさんのお顔拝む通夜に来たりて

入会を喜びくれしヒサさんのあの時の顔今も心に

日に一首作ると言いいしヒサさんを見習いたいと思えど成らず

今頃は矢島さんに会い支部の事歌の事など話し居るらん

歯科眼科整形外科のはしごせり後期高齢者保険に感謝

痛みなく歩ける様になったのと友は笑みおり手術痕見せる

雷雨との予報は外れ水を撒く午後の十時の気温三十度

エアコンの効きたる部屋は苦手にて山歩きおり汗滴らせ

浜田 はるみ☆ 埼玉

予選に選ばれるのさえ困難な世界陸上各種の競技
やり投げの一人の記録三回に五メートルもの差があると知る
競歩の苛酷さを見て驚きぬこんな競技をよくやるものだと
雨の後家の周りの草むしり無理せず二度に分けてやりたる
気温が十度下がりがりてホツとする夏日はもう来ないで欲しい
世の中が複雑になり昔のテレビドラマに心のみぬ
一メートル以上伸びたる下草が刈られ街路樹衣替えのよう

岩 淵 綾 子 岩手

秋分の日に盛岡の霊園で次男一家を待つ長子と共に
秋晴れに観音様がおだやかに待ちをりわが体調も良く
参拝後いつもの店は定休日初に行く店「かに正宗」に
来年は「かに正宗」を予約すと言ひくるる嫁よ嬉しかりける
初めての「かに正宗」は豪華にてぜひ来年もと意欲湧きくる
介護二となりたる吾は家族らと店に行く日をめざして生きむ
長子言ふお正月には会ひませう一日千秋の思ひなるかな

田 中 祐 子☆ 埼玉

首筋の痛くなるほど仰ぎ見る河敷花火は三年目の秋
ひまわりを空いっぱいに咲かせたる花火師の技に感謝をしつつ

花火好きの放浪画伯の邦画など子等と観たる日昭和は遙か
放浪の画伯山下清を演じし芦屋雁之助の温顔ファンなり
学童の息子ふたりと作りたる雨の休日のコロッケのやま
ゴロゴロのコロッケのやま何のその五十個二日でペロリ平らぐ
園児達も職員がたも皆無事と「篠突く雨」の恐怖を嫁御言う
通勤の自転車雨に流されて二日後ボロに戻ると微笑む

倉 浪 ゆ み 埼玉

月めでし叔父偲びつつ仰ぎ観る望月の月はやはらかきかな
余りにも酷い暑さかパンをおく夫がつぶやく「蟻が少ない」と
末の子を亡くし夫は何おもふ我とて同じ秋の風たつ
子は逝きて「良き母でありしか」と自問する答は返らず涙あふるる
ゑのころ草揺れある土手路園児らが歌ひつつ歩む秋の歌うた
あなうれし丸まる太つて顔を出す十月の庭に秋茗荷あり
曼珠沙華にしろ色あるを知りたるは九州柳川おとづれし時

林 美智子☆ 東京

川向こうの空にひとはけ長き雲のんびり清々きんきんずつと動かず
公園に並ぶ木犀この夏は箒のように刈り込まれたり
香をたどり花はどこかと木犀の枝を覗けばわずかな黄の花
例年は黄の絨毯が広がれど金木犀さびしやつと来た秋
新米にて栗ご飯炊きサンマ焼くこんな贅沢久し振りなり

秋田市の公園近き栗の下イガの山あり熊の食べ跡
栗を食ベイガをお尻の下に敷く熊座布団の話のありき
猿の次は鹿の目撃情報が稲城市メールにも流れる昨今

矢野 操 ☆ 香川

ゆでたての卵のすきな妹の来る時に合わせ三個ゆでてる
話し中表情のいい人と終わり余音なかなか

松中 賀代 ☆ 高知

そんなこと思わなくっていいんだよ青年は肩をゆらせて次へと進む
人間は出たか出なかったか問題で多くの人が苦しんでいる
病床に山鳩の声今朝も聞く水辺の近くで元気に生きろ
くらやみの中に外燈二基が建つ眠れぬ窓の吾れの友達

鈴木 やよい 東京

脚を閉ぢ動かぬ玉虫拾ひきてきらめく翅を窓辺にかざす
「幸水」の終はりて「豊水」店に並び暑さのなかにもわづかな秋あり
明後日から暑さ収まる予報にもその数日の暑さが辛し
狂ひゆく氣候に先の見えぬいま「平年」といふ言葉のむなし
水面をみつめ動かぬ青鷺の次の一瞬くちばしに魚
百均のメガネを壊し買ひくも夫は修理しまた一つ増やす
思ひ立ち自転車で行く墓参りまだらの雲が淡く広がる
墓参りにいつも花買ふ店閉まりガラスに覗くがらんとした床

本郷 歌子 ☆ 栃木

小芋と栗芒に団子を膳に乗せ今年の月は如何と出を待つ
バスケットのシーズンついに始まりぬ期待と心配に心が騒ぐ
開幕戦白星あげて会場を埋めたファンは沸き立つ如し
小波は日に煌めきて広がりゆきダム湖の果ては山へと入りゆく
犬の首輪ネオンの如く光放つ夜の散歩に新しき物見る
背表紙は褪せてしまいいぬ若き日に幾度も読みしケストナーの「子供だった頃」
墨を磨り筆を持つこと無くなりて墨の香床し書道展を見る
姉と二人墓参りする命日に思い出すは兄の良き事ばかり

村上 美江 岩手

震災とコロナ禍乗り越え二十四年どこか皆んなは誇らしく見ゆ
坂道を下りながらの屋台引き自づと歩みは足早になる
船の上大型クレインの大漁旗秋空の下「トラ舞い」見下ろす
五部落の合同手踊りいよいよと「祭りの曲」は待つても流れず
「リラックスして待て」と言ふアナウンス気抜けしたやう踊りの面面
スタッフは必死になつて改善す祭りの視線は一点に向く
「大丈夫」今度こそその「祭り歌」気を取り直し笑顔で再開
港湾にカラフルな風大漁旗音たて靡く引き船出港

伊澤 直子 ☆ 東京

クラシックホテルを巡る旅すると決めて日光金谷ホテルへ

東照宮を思わせるような彫刻のロビーの柱や食堂飾る
奥日光龍頭の滝の滝上へ急な坂と階段昇る

幅広く滝は落ちて轟音は耳に心地よく響きおりたり
長命寺の桜もちと言問団子アンテナショップで見かけたと言うて
隅田川から父持ち帰りし花見のみやげなつかしみつつ桜もち食ふ
秋冬の花の並びて華やかな園芸店の柵回りたり
シクラメン菊の鉢植え玄関に置きたくなりて幾鉢か買う

乾 義 江☆ 茨城

猛暑日にも負けず薄ら色付きてアカザ科のコキア微風に揺るる
コキア伸び倒れはせぬかと落ち付かぬ各々支柱に紐で束ねる
浴室に聞く虫の音に気のせいとか秋も間近と思わせくれる
求婚を受けたる孫は彼と訪い二人で仏前に手を合わせいる
彼と孫を魚市場に案内ししこたま食べる寿司の数々
何時になく広範囲に見る白亜紀の岩礁に強き白波の立つ
二泊せし一八一センチの彼と孫に幸多かれと念じ見送る
組閣する高市総裁の人事には刷新感無く残念に思う

永 光 徳 子☆ 東京

猛暑日の夏もようやく過ぎ去りて涼風の中花の種まく
夏の花すべて終わりにて枯れ色の庭は我が身と重なりて見ゆ
力まずに草とりをする秋日和土の香の立つ草の香もする

町内のスーパー次々撤退して移動販売の軽トラ走る

遠き日のロバのパン屋を思い出すメロデーこだまし子供集まる
子供等の声も姿も遠くなり高齢社会の渦中におりぬ

時はゆるやか

松 本 英 夫 東京

クリニックに「冬雷」読みつつ妻待てば半時間ごとのバス来ては去る
身の丈を越す大時計十二時に唸るがごと打つ妻待つ医院
診断日見送る妻へ会釈をす常より多く手をふりながら
病院に「冬雷」読みつつ結果待つしばしうつつを脇へ押しやり
診察の番号表示の変はる音むだと知りつつ顔をあげをり
血液の検査待つ人三十人二割へアップの前の賑はひ（二〇二三年）
入院の手続き、検査の待ち長し病める人らに時はゆるやか
胃カメラは八十過ぐれば入院と驚く我に否応のなし

稲 津 孝 子 福岡

化学会六十餘年会員たりし夫の退会受理せし通知
我幼くて弟逝きしとき流れゐし「天国と地獄」今も忘れず
夫と父母還りたる盆の麻幹の跡いつまでも残る玄関の石
貸本の漫画のありて「罪と罰」理解しにきと母言ひてゐき
独り住む独りの家に目の覚めて独りにあらずと思ふ日にち
会ひに来るといふドイツの友にドイツ語にてメールを送る五十年ぶりにて
夫の朝の仕度する夢みてをりぬ味噌汁つくり塩鮭焼きて

三度目の手術見合はせゐる心臓思ひ出しては脈測りをり
横山大観画伯の名刺いでてきつ義父の年齢画伯の年齢

戸部田　とくえ　福岡

友からの届く野菜とりどりに栗とカボスもあふるるほどに
老いといふ登り坂にさしかかりせて謙虚でありたしこの先
頼りにして二十年過ぎたる電子辞書壊れて哀しむ今更ながら
敬老の日あらため思ふなかなに悟りきれないこと多くして
骨折の後遺症の通院に夫の運転そのたび感謝せり
蝸ひよこのこゑせずなりてこの秋も心にしまふカナカナカナ

夜の明けの降り出す雨に安らげり老いて豫定のなき身となりて
十分に理解できずに『神曲』を読み終へる覚悟の年の暮れ

大塚　照　美　兵庫

雲ひとつなき中空に中秋の月は耀くわが屋根のうへ
やることもなすことすべて裏目とふ十月の運勢お手やはらかに
玄関を出づれば顔の涼しかり手にて日差しを避けることなく
市街より雪の立山連峰の景観みたと五十年経つ
牀操のあと銭湯はいよいよ同年輩を見送る手本と思ひて
酔ひまはれば饒舌なりし亡夫にて聞き上手なりき女房として
取り置きし亡夫の給料明細書の部厚き束を改めて見つ
亡き夫へたまにはどうぞと投函せし葉書五百枚はわれの手許に

三　好　規　子　福岡

もう二度と会へぬと思ひつつ弟の顔を見詰め九州へ発つ我
施設にて納涼祭の籤引きに一等賞あたる曾てなきこと
一等賞の動物の絵のガーゼタオル留学の孫とカナダへ渡る
施設にてコロナ患者の出で面会外出風呂も禁止になりつ
食堂の隣りの九十八歳が姑にいびられし昔をしばし語る
品のあり身嗜み良き九十八歳の媼のやうに歳重ねたし
足の指に卵を割りて目玉焼を作り微笑む両手無きレーナマリア
足の指にて運転しガソリンを口にて補給する歌手レーナマリア

須　藤　紀　子　埼玉

銀色の車に秋の夕日照り黄金となるも見る間に薄る
見渡せばたわなに実る柿の木が其処此処にありわが故郷は
秘蔵せる熟柿を父に勧められ　いらぬと言ひき若き日のわれ
大鋸屑の箱に収めて熟成を待ちゐし父のあの蜂谷柿
砂時計未来に時を流すとも過去へ流すと詠まるるもあり
両隣わが家の犬も居なくなり見知らぬ白き猫が庭ゆく
置き去りの猫を引き取り飼ふ兄に猫は蛙を捕りて持ち来る
放浪の癖ある猫が帰りきて母猫と眠る秋の縁先

佐　藤　靖　子　東京

これは夢まなこひらけば平穩の朝のくること知りゐる眠り

山ごぼう悪なすびまた昼顔と道の佳きものみな毒をもつ
たまにゆく総合スーパードイツもとは違ふ処に入りて迷ふ
新製品京都サイダーのネーミング良しと選びて褒められてをり
益虫のゆゑに平気とはならずちさき朝蜘蛛夜の蜘蛛処す
ポニーテールショートの髪へて行ける子がイケメンと言はれたる新学期
黒犬のクロ老ゆれども調子者けふ猫パンチされ外より戻る
液漏らし体濡れゐる猫チョコを菓子の名「シミチョココーン」と呼ぶ医は

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

スーパードイツのバックの秋刀魚この年の並ぶ二匹の肉付き宜し

大きさと姿かたちのめでたくてことしの秋刀魚ことは買ひぬ

注文の鮭はレーンを走りくる回転のない回転寿司店

庭草の育つ隙間の見えぬほど菊の繁れる頃となりたり

蕾はよ出てこよ庭の菊の群れ柿の実すでに色の付きつつ

名を呼びて挨拶できる仲となる庭にYさんの姿を見れば

名を呼べば庭に屈めるYさんの嬉しき顔の近づき来たり

Yさんの庭に案内されてゆく芝生を踏めば芝生の柔し

江 藤 ひさ子 大分

両手開く指の数にも及ばざる公園掃除に参加の老人

生ひ茂る雑草・落ち葉の半端無き嵩に戸惑ふ公園掃除

肩寄せて草を毛るも一向に作業進まぬ元気な草に

「そろそろ止めませう」老人会長の声に従ふ草は残れど

心残りも詮無し老いの公園掃除体力気力も限界なりて

食事会などは満員公園の掃除は僅少参加の様子

公園掃除に参加出来るは心身の健康故と和む此度こたびも

お疲れ様と右手振る友歩行器をゆつくり押して帰り行きたり

鈴 木 計 子 東京

義父母住み益くれ行きにし金沢はいま墓守るためにゆく町

降りる駅なりし金沢こたび過ぎ敦賀まで乗るその先ゆくため

夜半さめて眠れぬままに聞きてをり降り出す雨の静かな音を

紅葉を待たず落ちたる桜葉の枯れ色広ぐ八月の校庭

それなりに元気が尋ねそれなりに元気でゐると書いて出したり

にはとりを思はす古古古米いつの産か指折り逆算してみる

おにぎりの三角手にのせ豆腐切る母のせし事してをり吾は

石 渡 静 夫 茨城

運転台の小柄な女性運転手うしろ姿の頼もしきかな(常磐線)

秋来たる北の窓から入る風午後五時にして肌冷たく

投票の結果を見つめる高市氏笑顔の無しや頬引き締める(自民党総裁選)

働いてを五回繰り返す高市氏総裁就任覚悟を示す

縄張りの済んだ新築現場には櫓建ちたり井戸を掘るらし

会場に入れば四台の円卓を会員囲み熱気溢れる(冬雷大会)

歌はまず分かることだと大山氏私の歌は分からねとも言ふ
懇親会幕開け告げる中村氏声高らかに東京ラプソディー
六十年一度も休まず歌を出しここに立てりと赤間氏語る

西村 邦子 兵庫

女の孫は「やっと二十歳になったよ」と返信メールに絵文字を添へて
遠方への通学生活二年目で一人暮らしを孫は選びぬ
女の孫は幼きころに愛用の食器を選びて持ちて行きたる
姉の背を幼きころより追ひかけつその眼差しを力に変へて
この夏の暑さに枯れる花あれどハイビスカスは枝葉を広げる
冬雷に短歌が無きまま季めぐる月をさかのぼりて名前をさがす
出会ひたることはなけれど月づきの歌を待ちをりずつと前から

高橋 燿子 ☆ 埼玉

夫を見送り深呼吸して予定表見て動き出すデイスービスの日
切り詰めたせいかと見上げる木犀は花つかぬまま青々茂る
キラキラと蜻蛉群れ飛ぶ川べりに虫網掲げ追う子が走る
冬雷の大会の日や木犀の香る公園夫と連れ立つ
夫を介護する友より花束を賜る生日ありがたし
ときがわで手打ちうどんを馳走され慈光寺へと楽しき生日
お互いに一つ齢を重ねたり失うもの有り得るものあり
元気でね別れの時に子等は言う自然に生きる明日も生きたい

中国成都の旅

野崎 礼子 ☆ 埼玉

三国志の聖地と呼ばれし武侯祠に英雄の塑像我に迫りぬ
恵陵を囲みて朱の壁つづく劉備の影や風の道ゆく
麻婆豆腐山椒ひりと汗拭きつつ止まらぬ旨さ舌で踊る
成都の街高層ビル群林立す人並うねり光に溶けゆく
成都にリヤカー引く西瓜売りスマホ片手にQRコード揺れ
カフェ前にスマホ覗きつつ人の列老いも若きも画面をかざす
綿里店のスタバの看板目に留まり冷えしラテの味心ほどけゆく
成都大学学食にぎわう昼下がりに舌に染みわたる冬瓜の美味
中国に六千年の香り立ち心静かなる茶を味わう

飯嶋 久子 ☆ 茨城

百近き母となえいし百人一首ぼけ防止とは今にして知る
早口言葉認知症予防になると聞き外郎売りなどくりかえし居り
その昔飛行場射爆場と立ち位置変え広大なる丘海に向う
この地より帰らぬ飛行と知りながら発ちし若者心情如何に
江戸時代この地に三つの村ありき暴風七十五日吹き荒れたり
「千々乱風」と名付けらる後の「チチンブイブイ」の語源なると
幾度の苦難の道も知らぬげに丘は今「ネモフィラ」の丘
年間を花絶えることなき海浜公園いま秋「コキア」色づく
広大な公園の中非公開の地あり兎、栗鼠などのどかに遊ぶと

十月号作品一評

小林 芳枝

七月に二回目のキュウリの種をまき本に確かむ育苗のコツ 正田フミエ☆
夏野菜かと思っていた胡瓜には春時き・夏時き・秋時きがあるようで現在では何時でも食べられる。時期に合う育て方を調べながら育てる楽しさがみえる。挽ぎたての胡瓜の歯応えと香りは格別である。早朝の庭の水撒き楽しかりホース伸ばして心も洗う 田中祐子☆
夏は夜明けが早いこともあって早起きになる。日の照る前の庭に水撒きをする心地よさは「心も洗う」と言いたくなるほどの思いなのだろう。素敵な一日になるような予感がする。

歌会に参加してから変はりしかやや長くなる推敲の時 倉浪ゆみ
歌を作る時に言葉を彼是考えるのは当然なことなのだがどうしてそうするのかということを追及したことはなかった。推敲は歌会の中で自然に身についてくる

十月号作品一評

藤田 夏見

包丁を握りにくき時のためカット野菜を使ふ手もある 桜井美保子
連作により手指の動きの不自由がこころを詠まれている。カット野菜は主婦の味方になるのですよね。家事を編集作業をする作者の手に色々な沢山の味方が増えますように。

休耕田を覆いつくして葛の葉は尚道半ばまで蔓伸ばしおり 本郷歌子☆
美しく香り高い花は秋の七草のひとつであるが、夏が長くなり耕作を放置された田を覆い尽くすにとどまらず道の半分も蔓が伸びている。作者の嘆きに同調。木の葉さえ揺れる事なく気を揉みし台風海を北上して行く 乾 義江☆
台風情報にしっかりと心構えをされた作者。「木の葉さえ揺れる事なく気を揉みし」と一句から三句目までの作者の氣持がそのまま詠まれて引き込まれる。進路を外し海を北上した台風に一安心。

ものようである。歌会は多くの事を学ぶことのできる大切な場所である。

二歳児に曾ばあちゃんと呼ばれていて卒寿の吾は胸あつくする 松中賀代☆
私にはまだそう呼んでくれる子がいなのだけれどこの結句は心に残る。言葉に出来ない程の愛しさなのだろう。

緑濃き山々重なる彼方より入道雲の白く立ちたり 本郷歌子☆
夏の大きな風景が爽やかに詠まれていて心地良いが急に雷や豪雨に襲われることもあるのでこの後が気になるところである。結句を「立ちくる」にしてみると動きがでてくるかも。

熱中症になつてをられず兎も角も今日一日を遣り過ぐすのみ 村上美江
この夏は毎日熱中症を恐れて過ごしていた。同じような思いの人も多かったのではないだろうか。異常な暑さの中で一日を何とか無事に過ごそうとしてじっと堪えている苦しさが下句に籠っている。万博の大屋根リングを見てみたいと言えば娘はすぐ計画す 伊澤直子☆

音楽会帰りの電車の前の席老女の一人プログラム見入れり 松本英夫
音楽会を堪能しての帰りの電車内。前の席のそのプログラムに見入る女性に同じ感動を覚えた仲間としての眼差し。日々の暮らしを短歌に生み出せばまことに理想とけふも思ひつつ

戸部田とくえ
短歌は一瞬の情景を切り取ってその折りの気持ちを歌うもの、現実の暮らしの真実を三十一文字に生み出す。素晴らしき短歌との出会いの讃歌ですね。

盟にてプール遊びをせし娘は幼馴染みらとけふは酒席に 大塚照美
ひとつの盟をプールに見立てて遊んだ子供達は本当に幼かったのだろう。その幼馴染らと今日はお酒の席を共にするという娘さん達のさざめきも聞こえそう。野苺の甘さを言ひて勧めても不審顔に誰もたべない 須藤紀子
半世紀前の田舎の子供達は遊びの中でそういう自然の中の美味しいものを知っていました。今は自然の生り物を口にしないという考えもあるのでしょうか。お店には美味しいものが溢れどこからでも珍しいもののお取り寄せが可能な時代です。私もその自然からの香りと甘酸っぱさを作者同様に好みます。

大阪万博を詠んだ連作の一首目。願いを直ぐに叶えてくれた娘さんに感謝である。大人気というイタリヤ館にも入れたようで充実した一連になった。

今日は降るか明日は降るか待ち詫びれど願い空しく続く猛暑日 乾義江☆
来る日も来る日も日照りと暑さで苦しんでいる様子がみえる。「慈雨・甘雨」という語を思いながら私なども雨が降ってくれるのを願ってはがっかりしていたものである。

太陽を恋ひて咲きたる向日葵が地の太陽となりて輝く 須藤紀子
陽当たりを好み太陽の動きを追うように咲くという向日葵を「地の太陽」と称賛する作者、向日葵が大好きなのだろう。明るくて大らかな作品である。

若鳥も親鳥もみな集まりて燕の群れは旅立ちゆきぬ 須藤紀子
春になると日本に来て子育てする燕は秋になると暖かい国で冬を越すという。数万という大集団になるようで、その団結力の素晴らしさを感じさせる。

ないという考えもあるのでしょうか。お店には美味しいものが溢れどこからでも珍しいもののお取り寄せが可能な時代です。私もその自然からの香りと甘酸っぱさを作者同様に好みます。

いつも茶葉送りにし兄なくて寂しみをれば一箱出で来 佐藤靖子
兄上を見送られた。その寂しさはお茶の時間にそと顔を出す。いつも馴染んでいた茶葉はもうないのだ。と、そんな時に兄上からの茶葉が一箱出て来た。一息つきながら懐かしまれたのだろう。

御自由にどうぞとあれば有難くただく箱の身割れキャベツを 鈴木計子
野菜を作る人達は種まきから収穫までの時間を懸命に過ごす。収益もだが、育てたものを無駄にしたくないのだ。身割れキャベツが誰かに喜ばれることは価値があります。

十二月集

小林貞子 山形

秋深みひねもす本を読む窓に雨音強き一人の留守居
甘藷苗マルチの畝に二種植ゑし一粒万倍五月の良き日
薩摩芋ひでり続くも勢ひて山なす葉叢の猛猛と生ふ
ひと株に十本育ち一抱へ崩さぬやうに掘る「紅あづま」
秋の陽に「紅はるか」の肌美しく太さと形に報はれてをり
中秋の月に供へる里芋の株の子芋の未だに小し
十月六日夕べの空に名月は仄赤らみて華やかに出づ
塩茹でのまろき子芋と神酒すすき月見の宴はひそと慎まし
叢雲と夜長の道行銀の月いま満ち満ちて渡りゆくらむ

佐藤幸子 山形

間引き菜を捨つることなく一抱へ夫持ち来るを流れに洗ふ
山畑の桑の老木に絡みつく葛が盛りて花の香満ちる
水場への道は草藪獣道山畑のとなりは熊の領域
街中に熊の現れ餌漁るは山の不作のみにはあらず
耕作放棄されたる畑は人里と熊猪の住処を繋ぐ

土手に赤く咲く朝顔はひと夏を這ひて過ぎて丸き種つける
秋陽浴ぶるまんまる久留米鶏頭は妣の作りし御殿毬に似る
水澄める金魚の池の布袋草花六つ咲き夕に萎みぬ
一位の実啄みつつ鳴く鴨の美しき声聞く硝子戸越しに

山本述子 神奈川

彼岸花この暑さだと無理かとも思へど忘れず咲き揃ひたり
秋静か繁みの中の小川にはせせらぎ優しくしばし佇む（小網代の森）
烏瓜はるか高きにぶら下がり秋日浴びては赤く光りぬ
くさぎ咲く濃き桃色に紫混ざりパワー溢るる頼もしき花
ノーベル賞今年も日本に届けらる誉れ高き賞に喜び合へり
故里の栗拾ひ後の楽しみは焼栗茹で栗栗御飯なり
母逝きし年令となりても何一つ及ばぬ吾に少し淋しき

卯嶋貴子 東京

暖かい陽ざしの中で鳴く小鳥南に向かって渡りの途中
酔芙蓉は木にいっぱい白い花を朝に咲かせて夕方赤くなる
クロと呼ぶ夫の声に返事するカラスは家族の順位をつける
玄関のガラス戸に貼り付く白い物少しずつ動く家守の姿
となり家がリフォーム工事で壊されてねずみが吾家に入りて来たり

川上美智子 高知

「熟れましたよ」隣家の庭から塀越しに完熟無花果の挽きたてを受く

夏草に埋もれたるまま公園にジャングルジムやブランコのあり
自治体の人出不足と聞きており雇い入れたし草刈りロボット
友から「万博に行こう」とライン有り一瞬怯む酷暑の大阪
海風が吹き抜けてゆく万博会場にわくわく感のさらに膨らむ
会場を囲む大屋根リングの木材は四割程が高知県産
海外の人等と共に一時間半をベルギー館の行列に立つ
パビリオンのデジタル映像の映し出す未来の世界に平和を願う

大野 茜 神奈川

枯れ果ててひと月経たるフリージアの球根掘れば丸々太る
ヨーグルトにキウイと蜂蜜パンにジャム同じ朝食飽かず十年
眠れずにひと夜過ぎたと言ひながら妻はレッスンに足早に行く
手術後の初の体操動くたび体のどこかふらつきてをり
陸上の世界大会に躍動する日本選手の筋肉の張り
盆の入り仏壇の上に鬼灯を吊せばぼつと回り明るむ

安 川 敏 子☆ 埼玉

退院後川越歌会に出席す師とメンバーの笑顔が嬉しい
歩を止めて見上げる空は秋模様橋の下には群れ咲くコスモス
姉からのメロンが届き嬉しくて香りを確かめ暫くねかせる
朝三時いつもの様に目がさめる暗さを確かめ又眠剤をのむ
外出は若き友との二人連れ万事に気遣いくるるに感謝

バランスを二本の杖でとりながらゆっくり歩む幼児のように
信号を渡る時には集中し氣力をこめて急いで進む
リハビリに近くの友に会いに行く二人のランチは四倍美味しい

加 藤 富 子☆ 栃木

絡みつくへくそかずらの木の根元途中でプツンと切れて抜かれず
珍しき白き山吹秋来れば葉陰に黒き実をつけており
五年に一度の国勢調査の調査員友は大役承諾したり
街に行く高校生は衣替えしており今朝の気温二十二度
新しく購入したる洗濯機水圧合わず水漏れのする
ささがきを作れば香る秋牛蒡娘の希望のけんちん汁に

水 澤 タカ子 山形

九十二の苦楽を生きる今なれど歌友とつながり農とつながる
古里の長びく暑さを気にかけて電話をくれるカリフォルニアの子
重陽の節句はわれの誕生日ねぎらひの品二つ贈らる
敬老の品ありがたし被災地の富山の海の創作かまぼこ
べに色の風呂敷敷つつみに幸せの黄色と抹茶のカステラ二本
加州の子へ祝ひの御礼の電話せり「仕事ほどほど余暇を活かせよ」
足腰のおとろへ諾ひゆつくりと体動かし転ばぬ工夫を
戦時中の不安の暮らし忘れねど今の暮らしを和みて生きむ
南庭に朝顔の種こぼれしか藍色の花六十を数ふ

残響集

立石 節 子☆ 東京

広島原爆投下後咲いた花真つ赤なカンナ庭に咲きたり
不覚にも涙ながして読んだりし「かわいそうなぞう」思い出の書よ
天国へ招かれたらと思えども牧師の妻の苦労想わる
補聴器は要らぬ音まで拾いたり改めて知る天与の耳を
認知症ボランティアなる資格もちおれど危うし足もよろけて
遠地より大会に参加したる友昨年カナダ今年は福山

金子 八重子☆ 千葉

新米の味わい深めるしわしわの寒干し沢庵土用の干し梅
ウォーキングまだまだ暑いとためらえば金木犀はすでに香りぬ
高齢になるほど人は百歳と五ヶ月なんて細かく伝える
三人を次々抜いたアンカーの孫の動画を繰り返し見る
ウォーキングマシンでいくら歩いても進めないけど満足の汗
クーリングオフでと言えば不機嫌を顕にされたり保険の見直し
一口を噛み砕くこと三十回五口目辺りに挫折を味わう

片桐 美穂子 神奈川

初めての冬雷大会欠席す用意した服着ることもなく
孫たちを待ちつつ外の雨見やるおやつが並ぶ卓前にして
保育士とピアノストの手は深爪に相手を包む心がけから
ワルシャワのコンクールで弾く牛田氏の気品と技量画面越しでも
五月から押さえしピアノリサイタル牛田氏凱旋公演となれ

手賀 稔 子☆ メルボルン

休耕地見え隠れする山羊たちの草食む音を運ぶ涼風
海の水丸い地球にのっている不思議の中にひっそり生きる
白い腹見せて張り付く家守たちただ獲物待つ夜のしじまに
ひっそりと白き花咲く青じその穂先に憩うマルハナバチよ
豆乳の白き泉に松葉浮べ発酵を待つゆるやかな午後
ポッサムに中身食べられ空っぽのオレンジ揺れるランタンのよう

今 福崎 子☆ 東京

朝昼夕仕事の様に食事して夕焼け眺め今日も終りぬ
針仕事つくろい物なら出来るはず動きの悪い指をさすりつ
今日は先ずアイロン掛けをブラウスに取り出してみるあらたな心
これからは食べるものにも気をつけて身体いたわりそっと生きよう
今日も又明るい月をおおぎ見て明日の日暮を楽しみに待つ
美しい月に心をうばわれる老いて楽しみ多々有るを知る
八王子今は第二のふる里にて娘頼りに日々を楽しむ

十月号作品二評

井上 萱子

線路越え国道横切り猿軍団町の中にも
出沒と聞く 小林貞子

むかしは獣はけもの道を歩いたのに、
今では熊も猿も市中を通る。皆んなで渡
れば怖くないということか。人を恐れな
くなった猿の今後の被害に不安を抱く。

水張田に寄せるさざ波見て飽きず共
に揺れる心地のしつ 梶尾栄子

さざ波が立つくらい風の風があるのだろ
う。田植前の水張田には雲も映っている
かもしれない。「共に揺れる心地のし
つつ」の風景との一体感に感性が光る。

手術の後に当り前は一つもなし介助得
て済むやつの排泄 児玉孝子☆

術後の大変さを「当り前は一つもなし」
と的を射た表現で、結句にはその苦しみ
を具体的に強烈に詠む。

蟬しぐれ激しき増してボリュームを上
げて見ている朝ドラ「あんばん」

川上美智子☆

朝ドラの良い場面を察したかのような
蟬の声、競争しているような蟬しぐれに、
負けじとボリュームをあげたところに、
歌の焦点がある。盛夏ならではの歌。

土手道の大木の枝は葉裏見せ川面の耀
い映して揺れる 藤田夏見☆

「川面の耀い映して揺れる」という繊
細な観察に目を見張る。土手道の大木と
いう大らかなどしりした背景で生きた。

鹿児島県は全国三位の温泉地今日は山
の湯明日は海の湯 加藤富子☆

「今日は山の湯明日は海の湯」という
温泉三昧。何と羨しいことだろう。温泉
地の多さを山と海との畳み込みで表現。

初桃は香りも甘く姿よく皮ごと食べよ
と送られて来る 安川敏子☆

初桃の初々しい音感もよし、香りも甘
さも姿までよいのはやはり皮ごとが一番
だろう。送ってくれた人の桃に対する愛
情までも伝わる、具体的表現である。

同窓生の俯き歩く背中には七十年の月
日の重み 藤田英輔☆

人生七十年も歩けば、心身共に背負っ

十月号作品二評

江波戸愛子

絹糸が茶に色づきてたうきびの列なす
幹の実の太りくる 小林貞子

とうもろこしの育つ過程を丁寧な詠ん
で大事に育てている作者がみえる。

防鳥網を掛けて井戸水日日遣りしハニ
ーコーンの影の無き朝 小林貞子

鳥に食べられないように網を掛けて大
切に育ててきて食べごろになったトウモ
ロコシが無いことに気付いて驚く作者の
嘆きが聞こえてくるようだ。

もうこれが最後になるかと思ひつつ姉
と連れ立つ一泊旅行 梶尾栄子

長い間姉妹で楽しんできた旅行も年を
重ねて疲れを感じることがあるのだろう。
ふたりに行けなくなる寂しさを詠む。

骨密度よくすると飲みいし錠剤の合わ
ずに吾が骨こわしたるらし 児玉孝子

飲んでいたのはサプリメントのような
錠剤なのだろうか。薬に助けられること

はあるのだが害になることもあるらし
い。こわれた骨は元に戻ったのだろうか。
作者の不安が強くつたわる。

賜ひたる『短歌コレクション』読み返
し付箋だらけの本になる 東 ミチ

日々作歌の勉強をされているのがよく
判る歌で作者の学ぶ姿勢が素晴らしい。

気に入りのパンツの膝の小さき穴に布
充てて繕う祖母偲びつつ 川上美智子☆

小さい頃から祖父母と一緒に暮らして
いたのだろう。ご自分のパンツの膝の穴
を繕いながら、昔に繕ってくれた祖母を
懐かしく想い出している。

飛沫あげ六年生ら競いゆき深みに待ち
やる三年生を 藤田夏見☆

子供たちが入って遊べる川がある環境
がとても羨ましい。お孫さんたちの付き
添いで行ったのだろうが作者も共に楽し
んでいるようだ。遊びの中でも上級生が

しっかりと下級生を見守る様子がわかり
とても頼もしい。子供達と楽しんだ作者
の石水切りは何回だったのだろうか。

てきた荷物の重さが表われる。俯き歩く
背中にそれを見出した作者の感慨がある。
今年また心をこめて歌います「三度許
すまじ原爆を」 小嶋知葉☆

原水爆禁止運動と伴走した歌。「心を
こめて歌います」に切実な願いがある。

どこかに火種が燻っているから、今なお
歌い継がなければならないのだ。

摘み遅れの花は良く採み紅餅にあとの
乱花は寒天に入れん 水澤タカ子

紅花も終りの頃だろう。紅餅にできる
ものは製品の道へ、乱花は寒天に入れて

美しく食べる。捨てる物なく生かす技
アイシャドーも小さき指輪もわれわれ
と通ずるころこ古代エジプト 井上鈴子

古代エジプト展に見るアイシャドウや
指輪など、身を飾ることは古代も今も変
らないことを「通ずるころこ」と詠む。

鳥の害処理済みといふ赤大豆一穴三つ
丁寧な蒔く 奥山清子

豆よ芽を出せと呪文を唱えながら蒔い
ているのだろうか。結句にその思いがある。

鹿児島県は全国三位の温泉地今日は山
の湯明日は海の湯 加藤富子☆

毎年妹さんご家族とゆく鹿児島県の姪

御さんの家。三大家族が揃い賑やかで楽し
そう。いとこたちの交流は大人になっ
ても続いていくことだろう。下の句のリ
ズムが心地良い。

ベランダの陽除けの網の隙間から犬視
き待つ幼の姿 藤田英輔☆

いつも遊んでくれる幼児なのだろう。

もう帰ってくる時間とベランダにそれも
日除けの網の隙間から覗いて待っている、
帰宅した幼と犬の喜ぶすがたを想像して
思わず頬が緩んでしまう。

暑さ続き熱中症の恐れありて児らの登
下校スクールバスになる 井上鈴子

地球温暖化から地球沸騰化と言われる
ような暑さが続いている。登下校時の子
供達も帽子の間から汗を流しながら歩い
ている。作者のお住いの山形県では子供
達の為にスクールバスの登下校になった

ようだ。親御さんたちも安心して学校へ
送りだせるのではないだろうか。

十月号作品三評

山本 三男

西鶴を敢えて読むべし八十路過ぎ今こそ楽しむ動揺もなく 新井光雄☆

江戸時代後期の頃は軟文学が多かったのですが、元禄の頃の井原西鶴の作品は硬派の文学と言えるかも知れません。この歌はそのような西鶴に対する、作者のスタンスがよく見て取れる作品です。

郷愁に浸る間もなし田畑の処分の相談済ませるまでは 岩村知康

作者の落ち着かない気分が感じられます。久しぶりに故郷に帰って来たので郷愁に浸りたいところですが、相談ごとが気に掛かっているのでしょう。

本持ちて診察を待てばいつになく読みそめてすぐに名を呼ばれたり 佐々木政子

診察を待つ時間は名前を呼ばれるまでに、落ち着かず長く感じるものです。この歌では、本を読み始めるとすぐに名前を呼ばれています。本に熱中して時間を

短く感じたのかも知れませんが。

孫からの暑中ハガキのイラストのガリガリ君もとうとう溶けてる

金子八重子☆

お孫さんの書いたガリガリ君のかわいイラストが目につきます。今年も暑い夏でしたが、お孫さんから暑中見舞いが届いた時は暑さも忘れたでしょう。

スーパーはセルフレジになり慣れたればおもしろ楽しバーコードかざす 首藤文江☆

スーパーのセルフレジを積極的に楽しんでる様子がよく分かります。新しいことにはとかく尻込みしまいがちですが、作者の、それをなんなく受け入れる前向きな姿勢を感じます。

ラジオより祖父の馴染みの歌聞こゆ「花も嵐も踏み越えて」 片桐美穂子☆

この唄は西城八十の作詞で、三番の歌詞の中に「男柳がなに泣くものか」というしびれるような文句がでています。この作品にご祖父様の心意気を感じました。

久びきのモーニングに妻と行くコマダは満席で隣のドトール 後藤恭介☆

コマダとドトールという店名がよく活かされている作品です。時にご夫妻でこのような店に行き、現代の生活を楽しんでいるのですね。

木箱には「トンプク風」の貼紙あり幼き頃の苦き置き薬 今野澄子

「苦き」という言葉があるので、置き薬を飲まれた経験があるのですね。良薬は口に苦し、という言葉があるように、昔の薬は苦い味がしました。それも、置き薬の人っている木箱の記憶と共に、過去の思い出となりました。

建ちてより四十年のわが家に季節の花の途切れず咲きぬ 和田妙子

季節にに応じて咲く花を、途切れずに咲かせ続けるのは簡単なことではありません。いつも花を咲かせ続けてられたことは、大過のない生活が続いた証左でもあるでしょう。作者の花を愛し生活を大切する姿勢が感じられます。

十月号作品三評

橘 美千代

六階の窓に眺むるみどり田を割りて光れる一筋の川 佐々木政子

六階の窓よりの眺め。青々と育った稲田が広がり、その中央を彼方へと一筋川が流れている。割りて光れるの写実が見事。南魚沼の雪原をよぎり流れる魚野川を描いた富岡惣一郎の抽象画（トミオカホワイト美術館蔵）を彷彿とさせる景。

猫だけが残さるる家灯りなく夕暮れの中に鳴き声聞こゆ 羽田孝輝

主人に先立たれた飼い猫の運命は哀れである。人間達は皆それぞれどこではなく誰も猫に構ってなどくれない。灯りの消えた家に主人を捜しているのか、鳴き声が聞こえ無情さが一層際立ってくる。

頑張り屋の孫の弱音にホロリとしポジティブばかりを褒めて悔やみぬ 金子八重子☆

頑張りを褒められて一層頑張ってしまう。どんどん負荷が増してついに耐え難

く。優しい祖母に気を許しその辛さを明

かした様だ。それをわかってあげられる作者にお孫さんは救われたことだろう。

スーパーはセルフレジになり慣れたればおもしろ楽しバーコードかざす 首藤文江☆

スーパーのセルフレジは今では当たり前となった。最初は戸惑ったが慣れたら有人レジよりむしろ良いくらい。おもしろ楽しみに順応し楽しげな作者の姿が。

ブルーベリー手籠に摘んで山に盛る二粒三粒零れ落ちたり 越澤太郎☆

豊作のブルーベリーをどつさりと手籠に勢いよく山盛りにする。二粒や三粒零れ落ちたって気にしない。おおらかな歓びに溢れ読者も元気が湧いてくる。

「ひさしぶり」旧知と会へど名が出ない元気を確かめその場をとりなす 長谷川 剛

こういうことって確かにある。作者はスマートに乗り切った。それを無駄のない表現にてリズム良く歌っている。

姥百合の密かに咲くを訪ぬれば何処に

消えたか淡緑の花 今野澄子

廃墟となった古里は人影も無く川の音だけが高く響く。久しぶりに古里を訪れて作者は懐かしい場所を一つ一つ辿っているようだ。作者だけが知る場所に咲いていた姥百合の花はもう無かった。あの淡緑の花の姿をひたすらに求めて。

空見れば人工衛星と三日月とたそがれ時にくつきり見ゆる 長澤千恵子☆

まだ完全に暗くなりきっていない黄昏時の空。見上げると人工衛星と三日月がくつきりと見えたという。人工物と三日月との取り合わせの妙。シュールな光景が印象深い。そこを捉えた作者の感性。墓参り終りてひとり残りゐて追善供養の詠歌唱ふる 児珠純子

まだ若い甥君が施主となり、作者の父君と弟君の年回法要がとり行われた。どちらも六十前後で亡くなられ甥君は祖父に会ったことがないと。墓参を終えて皆が帰った後、作者は一人残り追善供養の御詠歌を唱え故人を偲ぶ。作者の他に父君をよく知るものも少なくなっている。

作品二

小林 芳枝 東京

世帯主の欄に我が名の記されて第四十七期理事会の役
十本の飲み物冷やし理事会に持ちゆく会計のわが初仕事
一万円にて断れるといふ決まりなども作られて利用する二名あり
組み立てて備蓄庫を置く各階のエレベーターの横の空間
安心といふには遠きことながら保存水五箱づつ入れてゆく
備蓄庫の設置終はりて戻りくる中古マンションの四階の部屋

本間 志津子 山形

祖母われへ東京に住む孫が来る遅めの休暇九月の半ば
七時より八時過ぎまで休みなく空を彩り花火賑はし
帰京する孫に酒田を知らしめむ本間美術館共に訪ひたり
敗戦後GHQの示唆により財閥解体なされ八十年
本邸を公民館へ別荘を美術館へと地主本間家は
庭園の鶴舞園を前に売店の抹茶と菓子にひととき憩ふ
涼風の街のゆく手に数多なる百日紅咲く季節となりぬ
廃校の中庭にありし百日紅今も咲き居むか五十年経て

梶尾 栄子 兵庫

献血をしたくとも出来ぬ老いの血に蚊は寄り来たる草引きをれば
たまさかに「小野」を辞書にて見つけたり国宝浄土寺ありてわが住む
見の限り今年の稲の作柄は良と言ふべし稲穂重たげ
正座して痺るる足と丸まれる背の喜びぬゴロリと寝転ぶ
信号に停止する位置図らずも木陰になりて束の間の幸
小さくとも町工場を引き継ぎて孤軍奮闘の子見守るばかり
不祥事にトップの交代聞くにつけ代はりのきかぬ子の辛さ思ふ

東 ミチ 青森

老いるのは我が身のみならず家ぬちに漏水ありて待つたのきかず
植ゑてより三年目となるダリアの球根今年二種類の花咲かせたり
吾の仕事箇条書きせる其の一つ防草シートを軒下に敷く
長かつたなどとは思はぬ米寿なり身体に重く歳とたたかふ
たがひに花を咲かせたる隣りの友が運ばれゆきてふた月過ぐる
十五夜も十六夜も空暗みゐて立待月の此の夜のよし

早乙女 イチ☆ 栃木

色づいたミカンの実を食べてみる甘かったので取ることにした
ミカンの実全部取ったらダンボール三箱とれたうれしかったな

植松 千恵子☆ 静岡

物置の釘に掛けっぱなしの日除け帽すっかり忘れて新品購入す

電車内手話を使って会話する離れた所で意思通じたり
草取りや犬の散歩や墓参り代行する仕事あり時代は変わる
鰯イカ秋刀魚稀なる大漁にて秋刀魚は店にあふれて並ぶ
A Iは本当に何でもやってくれる小さな悩みの解決法も
得したな応援米と表示され千七百八十円の備蓄米求む

川 俣 美治子☆ 栃木

少しだけ涼しくなりたる風受けてそばの花白くゆるやかにうねる
シクラメンに水やりすれば二枚の葉の間に小さき花芽ありたり
気がつけばまた出てしまう「よっこいしょ」いつからだろう何をするにも

結婚の記念日近し長き時経て今があるケーキを買おう

ゆでぐりと栗ご飯食べ今年また秋を感じる空高くして

冷蔵庫の奥に見つけたるニンジン黒くしぼみているを手取る
身近にはスキも今は見当たらず十五夜の月に寂しいねと言う

津 田 美知子 岩手

ちろちろと母の命の微かな火細き指さき吾の手求む

新聞紙床に広げてじやがいの皮むきする母眼裏にあり

続けざまに義母と実母と世を去りて大切な糸切れてしまひぬ
リハビリを兼ねたる夫の風呂掃除悔しいけれど吾よりきれい

やうやくに暑さ遠のき秋空に入道雲消えうろこ雲あり

職場内敷地内まで喫煙禁止車走らせ満喫する吾子

松 居 光 子 三重

三日前までの暑さが嘘のやうカーテン揺らして涼風入り来

寺庭に小さな秋を見つけたり公孫樹の黄葉はや始まりゐて

これもまた異常気象の所為なるか銀杏のもみぢ散りゐるもあり

わが足の衰へ憂ひ呉る子が転倒防止の録画送り来ぬ

D V Dを見ながら足の握力を強める体操試みてをり

行き慣れぬ大型店に孫のプレゼント探すに手間取り疲れ果てたり

「小泉八雲とセツ」とふ本を買ひ求め朝の連ドラ楽しみてをり

藤 田 夏 見☆ 広島

いからせた肩を撫でつつ腕を背を涙を拭きやるあんちゃんと呼び

われの名を呼びてまた呼び腕掴む指の形は赤く残れり

言葉にはもうならざれど繰り返し返す「たのむ」の形に唇うごく

くちびるにアイスクリームのひと雫静かにゆるむ顔になりたり

延命を望まぬ従兄は死を待てり姉と駆けゆく今日も会いたく

すがりつき涙にくれる姉の傍そつと離れて静まるを待つ

過疎の町の海辺の荒れ庭オリブの今年たわわに実りておりぬ

小 嶋 知 葉☆ 茨城

四十年守り育てたる「竜混」の演奏会に行く十月五日（竜ヶ崎混声合唱団）

歌うこと集うこと奪われしコロナ禍を超えて復活したり

わが街の合唱文化を高めたる歴代団長の姿が浮かぶ

丹精をこめて育てしさいもをくれる友あり掘りたてですと
茹であげたるさいものぬめり程よくて夕餉の一品味噌だれかけて
義父がよく息子に言いしことばあり「お前は位牌持ちなんだよ」と
海外に赴任の息子は年に数回旅人のようにわが家に滞在す

藤 田 英 輔 ☆ 高知

拳より太きパプリカ五つ生り枝は重きに耐える今夜も

風吹かぬハウスの中で飲む水を今日からトマトジュースと決める
茶色から黒に変われれば飲み頃のグラスを見てる幼と吾と

「じいちゃんとはめられないね」と真剣に髪留めを我に付ける二歳児

二歳児を乗せる車のトランクに長ぐつと傘と帽子とサンダル

いざ 哈爾濱^{ハルビン} その2

永 野 雅 子 ☆ 東京

特急の降車駅は並布力^{ヤブリ}駅 門前仲町より大きく立派

使用後の紙はトイレに流さずにゴミ箱へと言われ強き違和感

改札を抜ければニイハオと笑顔に囲まれ緊張走る

並布力のスキー場では中国の数多の大会開催さるるらし

駅前の国道はきれいに舗装され脇道逸れば田舎道なり

子羊は串刺しにされぐるぐると回り焼かれて我らを迎える

児 玉 孝 子 ☆ 愛知

手術して三キロ減りたる体重の週ごと計り数字増えくる

二ヶ月を休み参加する元気アップ教室指導員の来てゲームに興ず

常日頃何かと頼む嫁と娘を外食に誘う敬老の日に

九十五歳生日祝ぎて女孫より花籠いただく新しき秋

無花果を年ごと呉るる友人の乳癌手術を帰り際に言う

店頭に並ぶ秋刀魚の光りおり今夜いただく二百二十円

猛暑日を耐えて咲きたる萩の花九月の庭にそよると遊ぶ

大 塚 雅 子 ☆ 東京

行先を自分で選べる社員旅行今年度より導入される

東京で開催さるる世界陸上観戦ツアーを迷わず選ぶ

雨の中リレー侍の登場に観客席からあがる歓声

野 口 秀 子 山形

長町の夫の兄の七回忌生家の人らと車で出かく

夫の兄は夫と同じ歳に逝きたると知りて儚き因縁思ふ

歌友なる人の奥さん逝きたると驚く何も知らされずゐて

玄関にほのかに匂ふフローラル目をとど吸はん朝風のなか

朝の雨に濡れて光りゐる梅擬小さな紅き実たわわに付けて

秋深み街を歩めばぼつぼつと目に留まりゐる空き家の多し

松 崎 みき子 岩手

灼熱にカモメも見ない防波堤風ぎたる入江に浮玉ひとつ

あの夏の暑さ何処へ金木犀匂ふ涼しい今日の夕暮れ

穴熊はせつせと長屋の裏土を掘りてわが塞ぐスコップ重し

海面の照り返し受け日焼けした漁師の顔に亡き父想ふ
船底をペンキ塗りする若者に潮風吹いて辺り明るむ
大船渡さんま祭りの混雑に遠回りして実家に帰る

井上鈴子 山形

ダリア園のダリアが咲いたと友の誘ひに出向く秋空高く澄みたり
階段を下れば園を囲みあるみどりの中の万朶の白萩
兄と見し大海原とふダリア花濃き牡丹色今年も咲きぬ
その昔天竺牡丹と呼ばれたるダリアの色と形の多さ
兄逝きて二年余が過ぎやうやくに兄弟会す秋保温泉
万華鏡美術館の万華鏡覗く奥の奥に兄の面影映る気がして
ホテルのそばの草に混じりて露草が青色極むる姉の足元
稲刈りもおほよそ終り庭の柿が色付き初め秋進みゆく

奥山清子 山形

息絶えてなほ柔らかきかんばせの最も凜凜しくなりて納まる
夫逝くを妣に語りたし五十代に夫を亡くして生きにし母に
九州の生活に慣れたる娘来て家の片付け見事になせり
子供とはかくも温きものかなと並び居る背をしみじみ眺む
墓前に夫植ゑたりし桔梗咲きまはり一面葎の花咲く
夫在らば今日水曜は沐浴デー小さくなりしと言はず流しき
アルバムを捲れば笑顔の君に合ふ「われ人生に悔いはなし」とふ

歌集／歌書 御礼

編集室・佐藤靖子

■田中翠香歌集

『パーフェクトワールド』



『パーフェクトワールド』
表紙

令和七年七月二十五日発行、二九九首を収めている。二〇一七年に「未来短歌会」に入会し、二〇二〇年に「光射す海」五十首により第六六回角川短歌賞を受賞している。本書は第一歌集である。「水面」にも所属。自分の体験・人の体験・架空の歌人の作品から抜粋という形の上に立って展開されているようだが、その区別をつけず歌を挙げていくことにする。

博士論文を書くためイラクへ行った。

安全とされたる街の瓦礫など写真に撮って送るLINEに
解放が終わらぬ街を照らす月狙撃兵にも光あふれる
勉強は光といえどこの街で博論を書く光探せず
シリアの歌。

頑丈で扱いやすく替えがきく少年兵とカラシニコフは
「記者さんはその気になれば逃げられる」
イドリプの友ひとり泣く
爆撃の口まねだけがうまくなり少女は今年四歳となる
世界が不完全すぎるから生まれてくる歌だろうか。著者にとってパーフェクトワールドとは。パーフェクトワールドという見出しの中の歌。

本棚のひとつひとつの本たちを命綱とし生きる明日も
SNSを明るい遺書と呼ぶ人よ 東京湾は満ちる時刻だ
著者はこういう人かなと思う歌。
胸底を駆け回っている真つ白な狼をまだ死なせはしない
新しい時代がホームにまいります乗り換

■高野恵美子歌集

『薔薇』

(公益財団法人 角川文化振興財団刊)

え時間はあとわずかでず
砂浜で錆びたレールが途切れおりこの先はないこの先は翔べ

令和七年七月二十六日発行の第一歌集で四三六首を収録。
高齡の母、著者夫婦、里子という四人での生活には時間の限りがある、その今のうちをまとめた集である。

里親になる。命を預る決心をしたのだ。幼児である。その子を「君」で詠う。
おいしいと手作りパンを頬張る子君との縁あれと願へり
眠る前君は必ず独り言寂しき時の習はしなるか
笑顔にてサンドイッチと君は言ふ川の字に寝る秋めきし夜
そのうち「子」と言うようになる。
さつきまで悪態つきし子の体撫づれば早も寝息立てたり

作品三

レコード

新井 光 雄 ☆ 東京

レコードに我が人生を重ねれば差し詰めB面売れない歌手のB面より時折り飛び出すヒット曲我にはなかったそんなチャンスも秘かにも姉がラジオに聴いていた「S盤アワー」「L盤アワー」スピーカーに耳傾ける犬マーク記憶に残るレコード「運命」欧州に赴任せし時レコードは終焉の時それとは知らずブリュッセルで集めたレコード五百枚いまお蔵入り棚の下段にCDは扱い楽で針乗せるあのレコードの緊張感なしCDもあつという間の五百枚三分の一バッハが占める

高 藤 朱 美 ☆ 茨城

スーパールのお勧め品の生イカを焼きて厨に醬油の香る信号を待ちつつ隣りの畑見れば大根育ちて我も種蒔く琴の音が静かに響くお茶会で戴く練切抹茶と溶けあう嫁ぎ来てより我が市の火花は上がらずに近隣からの音のみ届くクーラーも扇風機もいらぬ夜は心地良くして眠りの深し涼しさに誘われ菊の蕾見ゆ月末に咲く新種育ちぬ
命日が迫れば気持ちは過去に行く亡夫との日々は鮮明なりて

塚 本 節 子 ☆ 茨城

避雷針覆いて伸びてゆく葛の蔓は空までつかまえんとす秋彼岸過ぎたる日々も真夏日にて暦の秋は夢のごとしもスマホケースに小銭しのばせ歩み出す風わたりくるゆきあいの空みやげ店にておもちゃを選びいる姉妹「ママにもなにか買ってあげるの」栗のイガ青きまま落ち食べられず風のみ知れる実りの終りたつぷりと脂のりたる秋刀魚焼く大根おろす手元軽やか夜半目覚め浮かぶ一首をしたためる上弦の月冴えわたりおり

佐々木 政 子 岩手

青空の広がり清すがし灰色の雲湧き出でて邪魔をするまで前にわが住みしことあるこのアパート柿の皮をむきペランダに干しき

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

天気予報見るのも嫌なこの暑さ余りの暑さに虫も出て来ず久しぶりに外遊びする子らの声暑さ知らざうろこ雲見ゆ一目見て今しかないと買い求め口閉ざさずに頬張る秋刀魚連日の異常な暑さ乗り切った祝いに一人であらし寿し作る

岩 村 知 康 長崎

朝明けて庭に鳴きゐるこほろぎの声澄み透る秋になりけり出づる野の辺り一面稲の田の黄に色づける秋ぞうれしき草におく露に濡れゐる野の隅に朝明けてなほ虫のこゑこゑ

おいしくない好物さへも子は言へり夫の入院夫好きの子は次々に波に挑んで初めての海辺に吾子は潮まみれなり
悩んで自分を責めることが多くなつた。

仕事ではあれほど待てた吾なのに吾子待てぬなり狭量故に叱らずに登校させた今日の朝洗濯物もビンと干したりぶちまけて友と語りし帰り道子の好物を買ひて帰れり
著者は子だけでなく九十四歳すぎの母親もみており、素話のボランティア等も行っている。子はどんな成長している。

里子のため、口座開設には難航する現実なども知ることができた。

最後に、ふつと懐しいような明かるい感じの歌一首。

数珠玉の青き丸き実通学路子らのおしゃべり聞きて光れり
(ながらみ書房刊)

十月号 十首選

冬雷集

益坂 順子

ひとしきり雷雨の荒れて青空に白き雲の浮く暮るるまへの空 大山敏夫
「かあさん」と幼の声が聞こえて今日も施設に夜が近づく 富田眞紀恵
盆月に入りて目につく庭の草動きの鈍き己に苛立つ 吉田綾子 ☆
独裁の蜜に群がる人間の絶えざる限り戦禍は民に 山口 嵩
長生きもほどほどが美しと思へどもまだまだ生きてゆく気のつもり 天野克彦
鳴き声にリズムあるらし休みては又鳴く蟬の動き目に追ふ 大塚亮子
生きるもの町ごと山ごと破壊して正義と言ひ張る戦争今も
ブレイクあざき ☆

街頭を離れて観たる星数は紛れ無きなる古里の空 中村哲也
受話器よりとぎれとぎれに伝ひくる友のその声これの世のこゑ 姉川素枝子
耳遠き兄との筆談書き残るノートの続きに 一行日記 井上蒼子

朝露に濡れてかがやく稲の穂は垂りつつなほも実りゐるらむ
茅草の生ひ繁りたるあぜ道に色鮮やけき曼珠沙華の花
野も山も秋色の朝こかしこ稲田に動く人影の見ゆ
実り穂の吊し干さるる稲架の下はや早緑の稲孫生え萌ゆ
ふるさとの父の棚田に稲刈りし少年の日の思ひ出さるる
早場米実る真夏に家族らと稲扱きしたる少年のころ

山崎 猛☆ 埼玉

ゆるやかな坂道なのに膝痛の左の足をゆっくり進む

秋風か心地よい風ほほをなで今年もようやく峠を越えた

壊れゆく脳持つ友は再三に決めた日にちを問い合わせ来る

朝一より作りし図面夕食の知らせを聞きて一打で消えぬ

廃業の友より贈られし印鑑は開業記念の熱き思い出

羽田 孝輝 山形

木犀の香りほのかに漂ひてごみ袋手に気持ち満つる朝

五十年経ちて集へる古稀祝ひ昔の話で盛り上がりたり

我儘を子供の自由と履き違へ驥のできぬ親数多あり

ことわらず熊らの領域に踏み入れば熊の怒るは当たり前なり

網戸越しに背伸びし外見る猫二匹何か来たかとわれも外見る

七十年経ちて気付ける父母の苦勞在りし日に気付けぬ不孝を悔いる

井出 裕子 静岡

かねてよりカプセルホテルなるものに泊まりてみたく前泊に選ぶ

美術館巡りのツアー台風にて中止の報聞く前泊の地に

熱中症警戒アラート出づる中電車乗り継ぎはや帰路に着く

台風の時期をはずして再びの願ひ膨らむ美術館巡り

母と観し初めての映画「喜びも悲しみも幾年月」の佐田啓二眩しく

越澤 太朗☆ 茨城

じつとして枝先にいる蟪蛄に「おいどうした」と指ふれてみる

「つるむらさき」の友の手土産いだきぬ緑葉厚くお浸しにする

秋茄子の支柱に止まる赤とんぼ隣同士で頷きあいぬ

芋蔓の後始末する土の中に蠢く虫も猛暑を凌ぐ

落花生の下草刈りに驚いて飛び立つ蝗の行方を追いぬ

秋冬の野菜の準備あれこれと残暑凌いで種蒔き急ぐ

牛久の菊祭りに今年も出品す「常陸秋そば」地元野菜で

後藤 恭介☆ 茨城

久びきの外房線の千葉の旅海辺の勝浦も炎天下なり

勝浦の名物というタンタン麵夕食に出て思わず手にする

夕蟬の必死に鳴くや樹々の枝いのちの短かさ知っているがに

枝先に空蟬残る庭の薔薇思わずスマホで写真に残す

栃木路へ料理の会のバスの旅ゴルフ場でのランチを味わう

冷房をかけて寝ている熱帯夜喉の乾きに目覚める深夜

十月号 十首選

十月集／残響集 山口 嵩

台風の九号さへも待ち遠し雨をもたらすものと思へば 本間志津子
小学生個性それぞれ寄り添ひて共に学びて楽しみてをり 山本述子
米農家ほどでもないが息子らは米に困らぬ暮らしに感謝 植松千恵子☆
ざつと降りすぐに止みたる梅雨の朝庭の緑の雫が光る 大野 茜
盆支度張り切る母の水羊羹団扇の音が懐かしくなる 松崎みき子
二時間半の朝仕事をへて食事後はテレビの音の中にまどろむ 佐藤幸子
五十年余吾の独り言聞きくれし博多人形たをやかにして 津田美知子
紛争地子どもの瞳空疎なり未来を断たれ死の床にあり 立石節子☆
AIにて九十代のわれに会う希望わきくく大阪万博 河原木光子☆
いわし雲大群となり泳ぎ出す行方に満月のぼりはじめて 手賀稔子☆

十月号 十首選

作品一 石渡 静夫

花咲くは来年ですか待つてます声かけながら水をたつぶり 桜井美保子
サンアンドレス公園訪ぬればはからずも鐘鳴る二時四十六分に 岩淵綾子
何とまあ先入観と違ひしか歌会は和む師の話にて 倉浪ゆみ
花を積みシエバードを乗せ家族四人狭い座席で毛だらけになる 林美智子☆
熱中症になつてをられず兎も角も今日一日を遣り過すのみ 村上美江
今日は降るか明日は降るか待ち詫びれど願い空しく続く猛暑日 乾義江☆
透きとほるたをやかな声サラ聞きて思ふは明治を駆けし人人 松本英夫
蝶達がこんなにも来てくれるとは来年はもつと花を植ゑよう 吉村昌子
夏空に白線引きて上昇すブルーインパルス拍手と歓声 西村邦子
早魃で実が太らぬと桃届く待ちいたる夫は二つめをかじる 高橋耀子☆

異文化の交流セミナー楽器と衣装ガーナの友の熱演光る

永井 享 子 ☆ 東京

愛犬があつという間に虹をわたり元気な時の思い出ばかり
柿の実の色づくを見て秋風を感じているか五感に問いぬ

松田 忠一 ☆ 山形

若葉から青葉に移るふるとよ散居の景を青田風わたる
いにしえの「裏山窯跡」探ると言う陰る地域の支えと託して
ゆりの園を君連れ添いて訪ねゆく彩り匂う夏の陽を浴びて
さりげなく移り過ぎゆく涼風よ酷暑の日々も実りの節へ
誇らしげに稲穂垂れ揺る田中の道安らぐ胸に秋の風吹く

十三夜藍白金に煌めいて風いで更けゆく豊穣の郷
紅葉する林に雫する音をうるわしき湖の朝霧と聞く
歳のせいかお酒のせいか涙出づアンジェラ・アキの「あなたにとつて」

長谷川 剛 山形

罅割れたる畑土に雨の降り注ぎ里芋の葉に生氣戻り来
黄金の稲穂の揺るる庄内の平野を見つつ米不足いづこ
秋あかね清しき空に群れて飛ぶめぐり来る秋告げるがごとく
菊人形黄菊白菊身に纏ひ楚々として立ち微笑み返す
ラジオからハウゼの奏でる「隅田川」なぜだか涙が零れてやまぬ
赤とんぼ羽を平めて棹の先大きな目玉が我を見つめる

青のボールがホールポストに吸ひ込まれ老いのゴルフアー背筋が伸びる

長澤 千恵子 ☆ 山形

猛暑で敬老会も儘ならず公民館から保養所になる
この年の「とらうの会」は長月に集ひて過ぎし亡き友偲ぶ
広間にてバイキング食山形の芋煮玉こん懐かしき味
日々老いて重ねる歳も後半に差し掛かり来て何を求めむ
朝霧に秋を感じる神無月暦捲りて残り確かむ

今野 澄子 山形

度度『歌壇』に載れる知人の名当地離れても健在を知る
老い二人仏壇の灯を電池式の蠟燭に換へ彼岸迎へむ
雑草の覆ひ被さるコルチカム草取りをして可憐な花を見る
廃棄前に仕舞ひし食器取り出して絵柄に手触り馴染みて迷ふ
秋冷にダリア秋桜勢ひて日日鮮やかに畑賑はふ

朝靄のダリア畑を包み込み朦朧体の絵画のごとし
検診の結果を受けて切符買ひ無事の報告す義姉の墓前に

児珠 純子 山形

いざ京都伝承曲のお唱へを学びに行かむ遠き地なれど
家に居て空路のチケット購ひてチェックインまで出来る今の世
デジタル化便利な世の中になりたるが「口伝」で広めし昔偲ばる
寺に嫁しわれの学びし梅花流唱ふる息に心調ふ

十月号 十首選

作品二 大塚 亮子

西空に大輪重ね花火咲く南の望月澄み
て黙有り 小林貞子
己が年考へけふは休めよと夏ばての身
に言はれ従ふ 梶尾栄子
盂蘭盆の間近になれば仏壇の埃を払ふ
如来さまに告げて 東ミチ
蟬しぐれ激しき増してポリウムを上
げて見ている朝ドラ「あんぱん」
川上美智子 ☆

土手道の大木の枝は葉裏見せ川面の耀
い映して揺れる 藤田夏見 ☆
初桃は香りも甘く姿よく皮ごと食べよ
と送られて来る 安川敏子 ☆
アリ達がセミの死骸を運び行く七日ば
かりのはかなき命を 谷田律子 ☆
四キロの梅干づくり完成す塩分一〇%
の味となりて 小嶋知葉 ☆
涼やかな朝の庭に水色の小さき朝顔数
多咲きつぐ 野口秀子
七夕に入籍すると言ふ孫娘機を織らず
にサックスを吹く 奥山清子

十月号 十首選

作品三 天野 克彦

六階の窓に眺むるみどり田を割りて光
れる一筋の川 佐々木政子
つゆほども帰り来ぬとは思はずに通院
の兄見送りし朝 羽田孝輝
干す梅の一つひとつに顔のありうす紅
色のそばかす美人も 塚本節子 ☆
一人居は手前の軽い皿ばかり奥の美濃
焼出番無くなり 金子八重子 ☆
願わくは戦知らずに世を去らむ戦後生
まれの吾のままで 片桐美穂子 ☆
人參は除草の効果表れて五寸という名
のままに育ちぬ 越澤太朗 ☆
空見れば人工衛星と三日月とたそがれ
時にくっきり見ゆる 長澤千恵子 ☆
早朝の鳥の囀り蟬の音も失せたるほど
の灼熱の日 今野澄子
退職金充てて建てたるこの墓にふた年
もなく入る弟 児珠純子
常ならば外出いとふ雨の日も今年はう
れし傘さして行く 和田妙子

12月の歌会、勉強会案内

◆冬雷ネット歌会

(ホームページにて掲載)

*誌上掲載の次作品の中より二首を
自選したものを、参加者全員で批
評し合う、開かれたもの。

(担当・桜井美保子)

◆川越歌会

12月22日(土) 午後一時～五時まで。

*J・R・東上線「川越」駅西口より
約五百メートル。「ウエスタ川越」
二階会議室にて開催。参加希望者
は事前にご連絡ください。

☎ 高橋耀子 (049-231-6515)

☎ 安川敏子 (090-4608-7265)

☎ 野崎礼子 (090-9971-8149)

川越歌会は、本年四月に市内の会員
の方々によって立ち上がりました。し
かし、市内には限られた数の会員数な
ので、隣接の市町村、広くは希望され
る冬雷会員の皆様も歓迎しております。
行楽も兼ねてぜひ一度お運びくだ
さい。大山敏夫も出席です。

難しき曲ほど好きになるものだ唱へ込めよとわが師の教へ
御詠歌で一番好きな曲「溪声」三分半かけ唱ふる清しさ
京の地へ集ひ来たる九十名二つの流派の御詠歌学ぶ
花園流の手振りの所作も美しく熟練の詠唱心に響く
いつの日か己が短歌に曲を付し唱へてみたし報恩のうた

河原木 光子 広島

「ハナミズキのみち」の本に導かれ陸前高田の碑の前に立つ

花水木の花咲く頃にもう一度訪ねてみたし山への道を

一人乗りのカヤックで初めて海に出るパドルで漕げど皆に追いつけず
左目の白内障は進行しミシン作業に不便感じる

針仕事読書の楽しみ続けたし白内障の手術を決める

帰り道ベンチに座り渡船待つ尾水道水道潮のかをりす

洗濯物干すベランダに聞こえる吹奏楽部の朝練の音

この夏はハンドクリーム手放せず猛暑エアコン乾燥ひどく

鈴木 裕 子☆ 千葉

日傘さす出番の減りて秋の空今日は晴天陽をあびようか

床の間に生けたる青きエノコログサ野辺にてあれば猫をもじゃらす

夕暮れの野に虫の声満ち溢れエノコログサと揺れて聞き入る

一本の木に集まりて掠鳥の今日の報告鳴き声たかし

中秋の名月あいにく曇り空月見うどんにわれは温もる

(☆印は新仮名遣い希望者です)

勝川桂子歌集

『老いを生きゐる』紹介

小林 芳枝

著者は四十代後半に義父と夫を亡く
し、三人の息子を育てながら残された店
を守り苦労した日々の記録として第一歌
集『重き荷』を六十歳の時に纏めて、少
し落ち着いた八十歳の時に第二歌集『ジ
グソーパズル』を纏めた。この歌集は第
三歌集である。年齢的な体調変化の多い
八十歳からの八年間が収められている。
「雲珠」短歌会所属の著者は還暦・傘寿・
米寿という節目を区切りとしてご自身の
歩んだ道を振り返って来られたのである
う。

立ち込む霧の中より明けるらし不

透明なる今日といふ日の

巻頭の歌は高原のホテルの早朝の風景
である。楽しい一日への期待と未来への

微かな不安のようなものも感じられる。

物忘れに失敗多き日々なれど命の限
り生きねばならぬ

じわじわと氷が解けてゆくやうに腰

から膝へと麻酔とけゆく

あと五度の角度が酷いリハビリの明

日に持ち越す百二十度の壁

悪いところばかりではない正常に動く

左手あるではないか

掛け声をかけねば動かぬこの体「機

関車やえもん」脳裏を過る

わが病「水泡性類天疱瘡」とふ難病

なりと医師に告げらる

八十歳を越えたと今まで頑張ってきた

体に少しずつ不調が現れてくるけれどし

っかりと受け止めて対応できている所が

素晴らしい。窮することがあっても前を

向いて工夫して通りぬけてきた精神力が

生きているようだ。

浅間峰に噴煙見えず雲もなし今日は

かならず良き日にならむ

わが生れし如月さむく籠りがちなれ

ど光は冬芽育む

よし、今日はストログノフと献立を
決めて早め買い物済ます

未来は明るいものと信じて「かならず

良き日にならむ」と自分に言い聞かせる。

冬芽を育む光は著者の心に持っているも

ののような温かさなのだろうか。そのよ

うな思いは乗り越えてきた困難な日々

身に付いたものなのだろう。スマホを見

ながら夕食にビーフストログノフを作ろ

うと決めて買物までする若さがある。

夫亡き後三人の息子を励みとし身を

粉に店を守りて来たり

長時間仕事に従事し家事もなす若か

りし日の夢にうなさる

苦しい時に真に頑張ってきたことは身

の内の何処かに残っていて偶に蘇ること

がある。それを支えにして新しく前に進

んで行けるのではないだろうか。

すき焼きに冷しやぶ石焼き松坂牛を

味はひ尽くしし松坂の旅

笑顔が見えるような巻末の歌からは、

まだまだ頑張れる力が感じられる。

(雲珠叢書五十篇 ながらみ書房刊)

斎藤茂吉記念館特別展

斎藤茂吉と ふるさと

—みちのく界隈—

蔵王よりなだれをなせる山膚に
白斑になりて雪消えのこる 茂吉

歌集「霜」「龍山のいただきにありて」

2025

9/13

2026

3/31

土

→

火

photo: 斎藤茂吉・蔵王瀧山にて(昭和16年5月)
山形県地図: 地理院地図

会場 斎藤茂吉記念館内守谷夫妻記念室

開館時間 9:00~17:00(入館受付16:45)

休館日 毎週水曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始(12月28日~1月3日)

入館料 大人 600円 / 学生 300円 / 小人 100円

※団体10名様以上割引 ※障がい者等割引(団体料金)

イベント情報

茂吉講座「斎藤茂吉のふるさとへのまなざしについて」

日時 / 令和7年11月9日(日) 13:30~14:30

参加 / 要申込(入館料 定員40人)

特別展チラシ持参の小・中・高校生は
入館料が無料となります。



公益財団法人

斎藤茂吉記念館

〒999-3101 山形県上山市北町字弁天1421
TEL023-672-7227 FAX023-672-2626
<https://www.mokichi.or.jp>



主催 / 公益財団法人 斎藤茂吉記念館
共催 / 山形県・公益財団法人 山形県生涯学習文化財団



編集後記

▽大会の作品批評は歌会のような形をとり、選者の批評のみならず、会場からも多くの発言をいただいた。充実感に満ちた一日だった。皆様に心より感謝申し上げます。

▽大山敏夫氏の連載に関連した資料に触れるべく、先日江東区の砂町文化センター内にある「石田波郷記念館」を訪ねた。波郷の生涯、俳句文学活動、江東区との関わりなど分かりやすい展示である。「波郷をめぐる人びと」のコーナーには中富正三（俳優大友柳太朗）とのつながりも紹介されていた。

▽ネット歌会は一年に一度休会で残りの十一月は毎月ネット上の歌会で活動している。参加方法などを簡単にまとめた案内があるので、ご希望の方にメールか郵送でお送りしたい。ご興味のある方は当方までご連絡を。（桜井美保子）

▽今年の大会も盛会裡に終了した。選者の方々の評をいただけたことは参加者には意義深かった。皆様のご協力に心底感謝致します。

▽今月の「大友柳太朗と美空ひばり」であるが、ひばりの短歌があることに驚いた。小林旭との結婚の際交わし合ったという歌。秘めた情熱が籠り、どこか河野裕子を彷彿とさせる相聞歌だ。返歌の男歌はどうも小林旭が作った様には思えない。誰かの代詠か？ 短歌繋がりで、ひばりと大友柳太朗とは交流があったのではなどという想像してしまう。（橘美千代）

▽早いもので本年最終号の刊行となる。様々なことが起こった一年、本当に皆様お世話になり感謝。十月の冬雷大会も熱心な皆様参加のもとに行われ、盛会裡に進められお開きとなった。

▽「大友柳太朗と美空ひばり」の7回目、一つのピークに達し、長めになった。残すは大友柳太朗の人と短歌について、少し掘り下げ

ながら纏めたい。あらためて言えば、大友柳太郎歌集『渚』は28歳時、そして今回紹介した美空ひばりの短歌も25歳時の作品、共に若ものであったのだ。（大山敏夫）

▽今年最後の編集後記なので一年を振り返ってみようと思っただけど猛暑でとても辛かったことしか思い浮かばない。そこで会員名簿を見ていたら退会した方より新入会の方が多かったことが嬉しかった。歌は仲間がいて互いに読み合ったり感想を聞いたりすることで数倍楽しくなるものだと思う。「孤独になつてはいけない」と木島先生も仰って居られた。近くの人に声をかけて小歌会を持つことも楽しいし鑑賞の眼が広がる。

▽第六十四回大会は皆様の御協力を戴いて楽しく充実した一日となった。今年は趣向を変えて会場の皆様にも積極的に発言して頂き和やかなが大変充実した批評会となった。総合司会の中村哲也様、進行を担当して頂いた橘美千代

様・マイクを持って会場を回って下さった大塚雅子様・永野雅子様・受付の青木初子様はじめご参加下さった皆様に感謝している。

▽当日ご出席下さった方々や事情があつて来られなかった方々からお祝いを戴いた。心よりお礼申し上げます。このところ会の運営も年々厳しくなっているので有難く有効に活用させて頂きます。

▽海外にお住いの方が二人居られるのでいつもの様に郵便局に行つた。オーストラリアへは送ることが出来たがカナダはスト中なので受付してもらえなかった。以前にもストをしているということだったが何とか送ることが出来たのに今回は駄目だった。長いストで国内での混乱はないのだろうか心配になってくる。

▽あと二ヶ月程で新しい年がやってくる。皆様どうぞお元気で良いお年をお迎え下さい。（小林芳枝）

▽御寄附御礼
玉城洋子氏

編集後記

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
*会費は原則として振替にて納入する事。
A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
D 維持会員（二部購入）二六〇〇〇円
E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、投稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
・担当 大山 敏夫
・担当 桜井美保子
作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）
・担当 小林 芳枝
・担当 小林 芳枝
 - 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
 - 一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
- 白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山 敏夫 tourai-oyama@nifty.com
小林 芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mihoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2025 年 12 月 1 日発行	
編集発行人	大山 敏夫
データ制作	冬雷編集室
印刷・製本	(株) ローヤル企画
発行所	冬雷短歌会
	350-1142 川越市藤間 540-2-207
	電話 090-2565-2263
事務局	125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
	振替 00140-8-92027
ホームページ	http://www.tourai.jp
頒 価	700 円